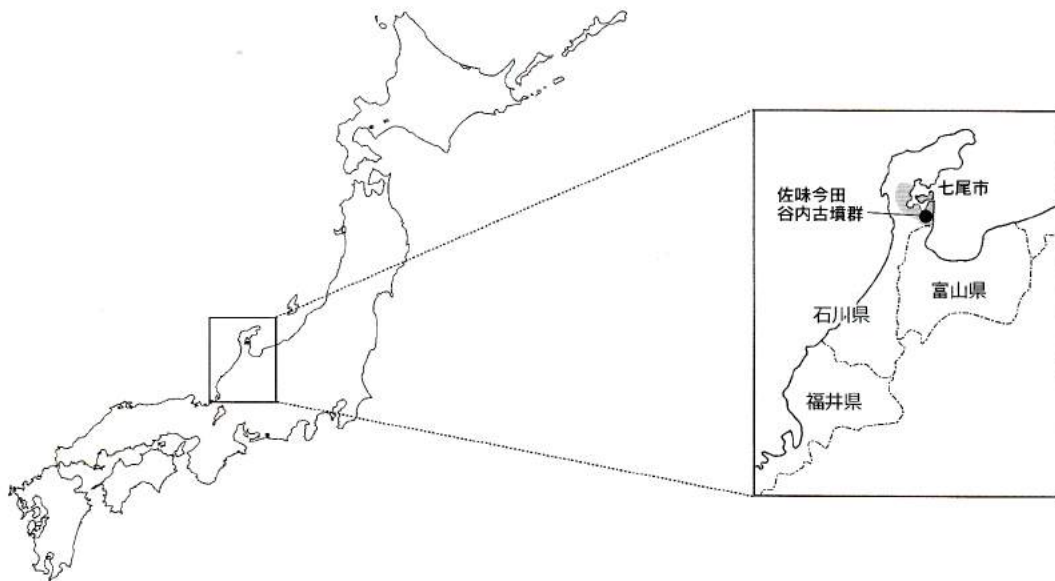


佐味今田谷内古墳群発掘調査報告書

—平成25・26・27年度に実施した内容確認調査報告—



2016. 3

石川県七尾市教育委員会



佐味今田谷内古墳群上空から七尾南湾を望む（南から）



万行遺跡から佐味今田谷内古墳群を望む（西から）

[平成14年撮影]

例言・凡例

1. 本書は七尾市佐味町地内に所在する佐味今田谷内古墳群で実施した保存目的の内容確認調査の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査事業は、七尾市教育委員会が平成25年度から27年度にかけて国庫及び県費補助金の交付を受けて実施したもので、事業費は、平成25年度(発掘調査) [総額2,474,961円]、平成26年度(発掘調査) [総額1,900,965円]、平成27年度(発掘調査・報告書作成) [総額1,830,000円(見込)]
3. 平成25～27年度の発掘調査(現場作業)は、七尾市教育委員会文化課職員 北林雅康が担当した。
4. 平成25～27年度の出土遺物の整理作業と報告書作成業務は、同職北林雅康・谷口健太郎が実施した。出土遺物の実測・トレース・写真撮影について直轄作業に加え、日本海航測株式会社、㈱太陽測地社に委託した。鉄製品の実測は、(公財)石川県埋蔵文化財センター林大智氏に依頼した。報告書作成業務は七尾市教育委員会文化課(七尾市文化財資料資料整理室)で実施した。
5. 発掘出土品の科学分析(X線透過撮影・蛍光X線分析)は、金沢学院大学 中村晋也准教授及び文化財学専攻歴史学専攻・保存科学研究室(原圭佑・西由美子・安田有里ほか学生諸君)が実施した。また、ガラス玉について金沢学院大学大学院生 竹森杏奈氏にご教示を得た。
6. 発掘調査及び報告書の刊行にあたっては、以下の機関と個人に協力、指導・助言をいただいた。(敬称略・順不同)
 - [機関]** 文化庁、石川県教育委員会事務局文化財課、(公財)石川県埋蔵文化財センター、佐味町会、一般財団法人磯貝記念佐味古墳保存会
 - [個人]** 磯貝英士・中川高志・橋本忠剛[一般財団法人磯貝記念佐味古墳保存会]、伊藤雅文・安中哲徳・林大智[(公財)石川県埋蔵文化財センター]、中村晋也(金沢学院大学)、唐川明史(石川考古学研究会副会長)、野村正純(地質)、西井武秀(植物)、竹森杏奈(金沢学院大学大学院修士2年)、三浦知徳(富山県上市町教育委員会)
 - [発掘現場]** 飯山良太郎、岡崎耕吉、小沢敏彦、上条靖志、沢味良一、島田晴夫、寺井信幸、三島菊雄、吉野貞夫(地元作業員の皆様)
7. 本書の遺構・遺物・挿図の指示は下記のとおりである。
 - (1) 水平基準は東京湾平均海水面(T.P.)を基準とした。
 - (2) 遺構図の方位は、真北を示す。
 - (3) 遺物実測図で断面黒塗りは須恵器・珠洲焼、白抜きは土師質土器を表す。赤彩はスクリーントーンで表す。
 - (4) 挿図の縮尺は図内に示す。
8. 本書の執筆編集は北林が担当した。
9. 本調査の出土遺物・記録写真などは、一括して七尾市教育委員会文化課で保管している。

目 次

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過

- 第1節 調査にいたる経緯と経過 1
- 第2節 調査日誌抄 1

第2章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的環境 4
- 第2節 歴史的環境 6

第3章 調査の成果

- 第1節 調査区割り 11
- 第2節 1号墳（前方後円墳） 11
- 第3節 2号墳（円墳） 17

第4章 自然科学分析

- 第1節 X線透過撮影 28
- 第2節 蛍光X線定性分析 29

第5章 まとめ

- 第1節 佐味今田谷内古墳群の調査成果 35
- まとめ 35

七尾市埋蔵文化財調査報告書一覧

報告書抄録

奥付

挿図目次

第1図	周辺の遺跡 (S=1/100,000)	9
第2図	佐味今田谷内古墳群出土遺物分布図及びグリッド割付図 (S=1/300)	12
第3図	1号墳前方部くびれ部出土遺物実測図 (S=1/3)	15
第4図	1号墳後円部出土遺物実測図 (S=1/3)	16
第5図	1号墳鉄製品・ガラス玉実測図 (S=1/2)	17
第6図	2号墳出土遺物実測図 (S=1/3)	18
第7図	佐味今田谷内古墳群測量図及び墳丘断面図 (S=1/300)	20
第8図	トレンチ1平面・土層実測図 (S=1/80)	22
第9図	トレンチ2平面・土層実測図 (S=1/80)	23
第10図	トレンチ3平面・土層実測図 (S=1/40)	24
第11図	トレンチ4平面・土層逼塞図 (S=1/80)	25
第12図	トレンチ5平面・土層実測図 (S=1/40)	26
第13図	トレンチ6平面・土層実測図 (S=1/40)	27
第14図	スペクトル図 [15kV]	30
第15図	スペクトル図 [45kV]	31
第16図	七尾鹿島地区主要古墳編年略図	36

図版目次

巻頭図版Ⅰ	I
巻頭図版Ⅱ	II
図版1 1号墳	38
図版2 1号墳 3号墳	39
図版3 2号墳	40
図版4 2号墳	41
図版5 遺物写真	42

表目次

表1 周辺の遺跡地名表	10
表2 佐味今田谷内古墳群遺物観察表	33

写真目次

写真1 地鎮祭	2	写真8 小口面 (10倍)	32
写真2 飛鳥Ⅱ	5	写真9 胴側面 (10倍)	32
写真3 鉄刀茎①	28	写真10 孔内壁 (20倍)	32
写真4 鉄刀茎②	28	写真11 小口研磨面 (20倍)	32
写真5 X線写真	28	写真12 引き伸ばされた楕円気泡 (100倍)	32
写真6 蛍光X線分析中	31	写真13 気泡列① (40倍)	32
写真7 ガラス玉 (実寸)	32	写真14 気泡列② (100倍)	32

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯と経過

史跡万行遺跡（2003指定、2004追加指定）は、古墳時代前期初頭の国内に類例を見ない超大型掘立柱建物群であるが、造営者については不明であったため、その究明が今後の整備活用に向けた課題とされた。市教委では、史跡万行遺跡周辺部に所在する古墳を再確認したところ、佐味今田谷内古墳群の存在が注目された。折りしも、古墳の存在する土地の所有者が佐味今田谷内古墳群の保存と周辺環境の維持、地域の歴史の啓蒙を目的とした保存会を立ち上げ、調査及び保存への協力があったため、国、県とも協議を重ね、史跡万行遺跡との関連性、七尾（南湾）地域における古墳の移り変わりを解明するために、保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

1) 調査の契機

佐味今田谷内古墳群の地権者である礪貝氏は平成7年頃から父祖の故地である佐味町の実家・土地の管理等を行うにあたり、毎年来尾されており、将来的には佐味今田谷内古墳群の調査研究と保存を図りたいとの想いを市教委に相談していた。市教委としては、平成25年度以降での発掘調査を目指し、県・国と協議して進めていく旨を伝えた。

地権者は早速、「一般財団法人礪貝記念藤平谷内古墳保存会」（以下、「保存会」）設立の準備に取り掛かり、平成24年2月3日に一般財団法人設立登記（後日、「一般財団法人礪貝記念佐味古墳保存会」に名称変更）を完了した。同保存会の理事会で決算報告や事業計画等の意見交換がなされ、特に地域の文化活動（小学生）への貢献が検討されたとのことであった。市教委は平成25年度からの調査に向けて県・国と協議し、3ヵ年の調査計画を実施することになった。

2) 調査前夜

古墳のある丘陵尾根は、地域特有の照葉樹林（極相）を形成しながらも、植生された杉や竹林が繁茂しており、昼でも薄暗く、古墳の周辺は鬱蒼としており、辛うじて墳丘の高まりが確認できる程の状況であった。墳丘測量等の調査を実施するにあたり、現状の樹木が障害になるため、取り扱いが問題であった。しかし、「保存会」が尾根の周辺および墳丘にかかる樹木の伐採・玉切り等の作業を実施され、墳丘の状況を把握することができた。また、同様に樹木の伐採にあたり、能登で山林の間伐等で薪を確保しながら里山保全を実践している団体も材の伐採、搬出に一役を買っており、古墳周辺は見通しが良好となり、発掘調査をスムーズに実施する準備が整った。

第2節 調査日誌抄

1) 平成25年度調査

平成25年10月15日付け発教文第41号で文化財保護法第99条第1項の規定に基づき発掘調査報告を石川県教育委員会に提出。現地調査は、10月18日から調査を開始し、12月6日に終了。図面整理、遺物洗浄等の整理作業を随時実施し、平成26年3月7日～3月18日にかけて調査区周辺の環境整備を行った。平成26年3月19日付け発教文第89号で遺失物法第4条1項に基づき、「埋蔵物の発見届」（藤平谷内古墳群出土品）を七尾警察署長に提出。平成26年4月4日付け教文第63号により石川県教育委員会教育長より七尾市教育委員会教育長宛に「埋蔵物の文化財認定」の通知があった。これを受けて、平成26年4月9日付け収教文第26号「埋蔵文化財保管証」を石川県教育委員会教育長に提出した。

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯と経過

史跡万行遺跡（2003指定、2004追加指定）は、古墳時代前期初頭の国内に類例を見ない超大型掘立柱建物群であるが、造営者については不明であったため、その究明が今後の整備活用に向けた課題とされた。市教委では、史跡万行遺跡周辺部に所在する古墳を再確認したところ、佐味今田谷内古墳群の存在が注目された。折りしも、古墳の存在する土地の所有者が佐味今田谷内古墳群の保存と周辺環境の維持、地域の歴史の啓蒙を目的とした保存会を立ち上げ、調査及び保存への協力があったため、国、県とも協議を重ね、史跡万行遺跡との関連性、七尾(南湾)地域における古墳の移り変わりを解明するために、保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

1) 調査の契機

佐味今田谷内古墳群の地権者である礪貝氏は平成7年頃から父祖の故地である佐味町の実家・土地の管理等を行うにあたり、毎年来尾されており、将来的には佐味今田谷内古墳群の調査研究と保存を図りたいとの想いを市教委に相談していた。市教委としては、平成25年度以降での発掘調査を目指し、県・国と協議して進めていく旨を伝えた。

地権者は早速、「一般財団法人礪貝記念藤平谷内古墳保存会」（以下、「保存会」）設立の準備に取り掛かり、平成24年2月3日に一般財団法人設立登記（後日、「一般財団法人礪貝記念佐味古墳保存会」に名称変更）を完了した。同保存会の理事会で決算報告や事業計画等の意見交換がなされ、特に地域の文化活動（小学生）への貢献が検討されたとのことであった。市教委は平成25年度からの調査に向けて県・国と協議し、3ヵ年の調査計画を実施することになった。

2) 調査前夜

古墳のある丘陵尾根は、地域特有の照葉樹林(極相)を形成しながらも、植生された杉や竹林が繁茂しており、昼でも薄暗く、古墳の周辺は鬱蒼としており、辛うじて墳丘の高まりが確認できる程の状況であった。墳丘測量等の調査を実施するにあたり、現状の樹木が障害になるため、取り扱いが問題であった。しかし、「保存会」が尾根の周辺および墳丘にかかる樹木の伐採・玉切り等の作業を実施され、墳丘の状況を把握することができた。また、同様に樹木の伐採にあたり、能登で山林の間伐等で薪を確保しながら里山保全を実践している団体も材の伐採、搬出に一役を買っており、古墳周辺は見通しが良好となり、発掘調査をスムーズに実施する準備が整った。

第2節 調査日誌抄

1) 平成25年度調査

平成25年10月15日付け発教文第41号で文化財保護法第99条第1項の規定に基づき発掘調査報告を石川県教育委員会に提出。現地調査は、10月18日から調査を開始し、12月6日に終了。図面整理、遺物洗浄等の整理作業を随時実施し、平成26年3月7日～3月18日にかけて調査区周辺の環境整備を行った。平成26年3月19日付け発教文第89号で遺失物法第4条1項に基づき、「埋蔵物の発見届」（藤平谷内古墳群出土品）を七尾警察署長に提出。平成26年4月4日付け教文第63号により石川県教育委員会教育長より七尾市教育委員会教育長宛に「埋蔵物の文化財認定」の通知があった。これを受けて、平成26年4月9日付け収教文第26号「埋蔵文化財保管証」を石川県教育委員会教育長に提出した。

平成25 (2013) 年度

- 10月18日 (金) 1号墳(前方後円墳)上で被葬者の魂を鎮め、調査の安全を祈る清め祓えの儀式を行う。
- 10月22日 (火) 間伐材の搬出
- 10月23日 (水) 竹伐採・抜根
- 11月 5日 (火) 伐採・搬出、下草刈り
- 11月 8日 (金) 墳丘上の竹を伐根。後円部上から板石、土師器、須恵器が出土。
水ノ江調査官(文化庁)、川畑・加藤・谷内氏(県文化財課)が来跡。
- 11月14日 (木) 墳丘上の竹を伐根。唐鍬・鉞・掛矢が破損。
後円部は徹底的な盗掘を受ける。板石・海石が散乱。
須恵器の細片が前方部・くびれ部西側で多く表採。
- 11月21日 (木) 墳丘上の竹伐根ほぼ終える。
- 11月22日 (金) 杉の伐根に取り掛かる。
- 12月 3日 (火) 墳丘掃除
- 12月 5日 (木) 墳丘測量、出土遺物の番号付け
- 12月 6日 (金) 写真撮影、出土遺物取り上げ
機材・現場道具撤収
- 3月18日 (火) 環境整備(土嚢作成・運搬・設置)



写真1 調査前の地鎮祭

2) 平成26年度調査

平成26年8月29日付け発教文第25号で文化財保護法第99条第1項の規定に基づき発掘調査報告を石川県教育委員会に提出。現地調査は、9月9日から調査を開始し、11月27日に終了。平成26年11月27日付け発教文第40号で遺失物法第4条1項に基づき、「埋蔵物の発見届」(藤平谷内古墳群出土品)を七尾警察署長に提出。平成26年12月22日付け教文第2806号により石川県教育委員会教育長より七尾市教育委員会教育長宛に「埋蔵物の文化財認定」の通知があった。これを受けて、平成27年1月5日付け収教文第564号「埋蔵文化財保管証」を石川県教育委員会教育長に提出した。また、平成27年1月8日付け発教文第45号「埋蔵文化財包蔵地の名称変更について」の協議を行い、平成27年1月19日付け教文第2965号により、「藤平谷内古墳群」から「佐味今田谷内古墳群」への名称変更の通知が石川県教育委員会文化財課長から七尾市教育委員会教育長宛にあった。

平成26 (2014) 年度

- 9月 9日 (火) 草刈り、道普請。基準杭設置。
- 9月11日 (木) 1号墳の南北に主軸を設定。後円部と前方部にも直交して主軸を設定する。
- 9月16日 (火) 1号墳(前方後円墳)後円部南端トレンチ1掘り下げ
2号墳(円墳)墳丘上の竹伐採。
- 9月22日 (火) 3号墳(方墳状にも見える)下草刈り
- 10月 2日 (金) 1号墳 墳裾を確認するために後円部東側にトレンチ2を設定。
- 10月10日 (金) T1で後円部南墳裾地点の精査。T2で後円部東端に溝状遺構の痕跡確認。かく乱を利用して土層の確認。前方部北端にT3を設定。
- 10月24日 (金) 1号墳T3を精査し、ベースと墳丘流出土確認。後円部とくびれ部を精査、須恵器出土
- 10月28日 (火) 県埋文センター伊藤雅文氏来跡。
- 10月30日 (木) 1号墳 T1から周溝見当たらず。T2を東に拡張。T3前方部裾?傾斜面を確認。
- 11月 7日 (金) T1北に拡張。小さい砂岩出土。T2の標高22m地点から黒褐色土(旧表土)を検出。東拡張部から比高差1mの落ち込みを確認。1号墳or2号墳の周溝とは考えにくく、古墳以前の遺構の可能性も考えられた。
- 11月 8日 (土) 地元向け現地説明会を開催。

- 11月12日（水） トレンチ1・2 実測作業
- 11月17日（月） 墳丘出土遺物地点の番号付け
- 11月20日（木） 写真撮影、出土品取り上げ、トレンチ実測作業。
- 11月27日（木） トレンチ埋め戻し。墳丘養生。

3) 平成27年度調査

平成27年10月5日付け発教文第37号で文化財保護法第99条第1項の規定に基づき発掘調査報告を石川県教育委員会に提出。現地調査は、10月16日から調査を開始し、12月18日に終了。平成28年1月6日付け発教文第51号で遺失物法第4条1項に基づき、「埋蔵物の発見届」（佐味今田谷内古墳群出土品）を七尾警察署長に提出。平成28年1月13日付け教文第2667号により石川県教育委員会教育長から七尾市教育委員会教育長宛に「埋蔵物の文化財認定」の通知があった。これを受けて、平成28年1月13日付け収教文第276号「埋蔵文化財保管証」を石川県教育委員会教育長に提出した。

平成27（2015）年度

- 10月16日（金） 草刈り・道普請等の発掘準備。猪が出没し、墳丘の一部が掘り起こされていた。
- 10月20日（火） 1号墳 後円部東側のトレンチ2を掘り返す。2号墳清掃。礧貝氏来跡。
- 10月22日（木） T2を拡張し、後円部東端の溝状遺構の広がりを確認。2号墳の西側にT4を設定。
- 10月29日（木） 1号墳T2を精査。溝状遺構の埋土確認。2号墳T4西側を拡張し、落ち込みを確認。埋土状況からT2の溝状遺構と同一で東側の肩の可能性が高まった。
- 11月 4日（水） T2墳頂部よりガラス製小玉1点、刀の茎と鉄鍔が錆着した鉄製品出土。
- 11月10日（火） T2の排土を篩がけ。T4落ち込み掘り下げ。同一の溝と認識。
- 11月13日（金） 2号墳T4の標高22.5m地点から黒褐色土（旧表土）を検出。1号墳の旧表土と同一層か。旧表土の上は盛土、下は地山（赤褐色土）。溝は2号墳の周溝の可能性あり。
- 11月16日（月） T4分層作業。2号墳の南西裾部T5の掘り下げ。2号墳北西部に溝のつながりを確認するため、T6を設定。
- 11月18日（水） T2・T4実測作業。～12月3日（木）
- 12月 7日（月） T6清掃、分層作業。地形に沿って北に傾斜する落ちを確認。周溝の延長か？西側から炭・焼けた粘土など焼土層を検出。火を使用した炉などの構造物か。
- 12月14日（月） T5・T6実測作業。土色付け。埋め戻し。
- 12月15日（火） 写真撮影。埋め戻し。
- 12月18日（金） トレンチ埋め戻し完了。

出土品整理、報告書刊行の経緯

出土品の整理作業は、平成25・27年度に㈱太陽測地社、平成26年度に㈱日本海航測に遺物の実測・トレース・写真撮影を委託し、一部を直営で実施。平成27年度に墳丘測量図、トレンチ平面図・断面図面および現場写真の整理業務を実施。図面・写真のレイアウト・報告書の作成は、七尾市教育委員会文化課が実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

七尾市は旧国の能登、現在の石川県に属し、本州中央部の日本海側に突き出た能登半島の付け根に位置する。能登の地形は峻険な低山が海岸部まで迫り、大きな河川はなく、小河川が形成する小規模な扇状地が分布している。半島南西部の外浦（羽咋市）から北東部の七尾南湾（七尾市）にかけて、西は眉丈山系、東は石動山系に挟まれた能登随一の穀倉地帯である邑知地溝帯が存在し、地溝帯の北端部の沖積地には能登国分寺跡や栄町遺跡、東丘陵部には古府タブノキダ遺跡や千野廃寺、七尾城下町が所在し、丘陵北端には矢田遺跡や万行遺跡が存在する。

平成16年10月1日に七尾市と鹿島郡の中島町・田鶴浜町・能登島町の1市3町が合併し、新生七尾市として新たな一步を踏み出したばかりである。隣接する市町村は、海を挟んで能登島の北側に穴水町、西側に志賀町、南側に中能登町及び富山県氷見市が接する。面積は317,92km²を測り、平成17年10月1日時点では人口62,839人を数える。平成7年の国勢調査では67,368人、平成22年の国勢調査では57,900人を数え、平成27年の国勢調査（速報値）では、55,348人と近年の過疎化及び少子高齢化による人口減少が問題となっている。

七尾市の平均気温は13.5℃、平均降水量は2,064.4mmを測る。日本の平均降水量が約1,700mmであるため、やはり北陸地方特有の雨の多い地域と言える。平均積雪量は31cmで加賀地方や越中（富山県）・越後（新潟県）と比較すると積雪量は多くない。

開湯1,200年を迎えた“和倉温泉”や七尾市街地では「青柏祭の曳山行事（通称でか山）」、中島地区の「熊甲二十日祭の杵旗行事」、「能登島向田の火祭」などの国指定重要無形民俗文化財の祭礼が季節を通して能登の風土・生活に密着した種々の伝統ある祭りが息づいている。¹⁾

□七尾のみなど

能登島と崎山半島が自然の防波堤となり、天然の良港である七尾湾は海が荒れた時は避難港として現在も役割を担っている。七尾市内には能登島、七尾西湾・南湾部、富山湾沿岸部（灘浦）を含めて現在24の港が存在し、大半が漁港であり、一部地方港湾を含み、七尾港は特定重要港湾として国内や外国からの船舶が平成16年度で1,374隻入港している。輸入される貨物の99%は石炭・LPG・木材で占められ、石炭はオーストラリア、LPGはクウェート、木材はロシアが上位を占める。石炭は、七尾港の東に位置する北陸電力七尾大田火力発電所へ、LPガスは七尾南湾の入口にあるLPガス国家備蓄基地に運搬される。¹⁾

近年、エネルギー港湾としての役割が強まっている七尾港であるが、その歴史を文献史料から辿ると古代まで遡ることができる。斉明6年(660)に越の国守阿部比羅夫率いる船団が肅慎(みしはせ)と戦い、能登国造能登臣馬身童が戦死したことを「日本書紀」は伝えているが、当時七尾南湾は鹿嶋津と呼ばれ、七尾港は大和朝廷が東北へ進出するための兵站地及び発信基地として機能していた推測されている。

軍港としての機能は幕末にも存在し、文久2年(1862)三月に幕府により「七尾軍艦所」が創建された。²⁾所在地は、矢田・万行村境の海岸沿いに広さは約65,000m²で蒸気製造所とも呼ばれ、棧橋・造船所・製鉄所・機械室・倉庫・工員住宅などがあった。慶応3年(1867)には欧米の外国船が初めて入港している。幕末から明治初頭にかけて藩は艦船を計七隻購入・所有し、これらには白地に紺の劍梅鉢(前田家の家紋)の船印を付したので、「梅鉢海軍」と称された。明治2年(1869)2月には、金

沢藩（版籍奉還に際し加賀藩を金沢藩と改めた）が軍艦所に洋学所を設けており、明治37年(1904)年には七尾線から鉄道を分岐し臨港線を敷設し、七尾港駅を開設した。近世では、日本海海運もいよいよ盛んになり、北前船も活躍するが、幕末には加能両国の中で所口湊は宮腰に次ぐ船数、入船回数を誇る。中世に能登島山氏の外港（所口湊）として軍事・貿易面で栄え、古代には能登国の国津である鹿嶋津として機能している。天平20年（748）春に大伴家持が能登巡行をした際に詠んだ歌には、当時の七尾周辺の状況を示す歌もあり、「鳥総立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ」³⁾ から造船などに用いられる木材資源や造船技術が存在したことが読み取れ、5世紀には矢田丸山古墳や矢田高木森古墳などの被葬者が七尾南湾（鹿嶋津）を背景に政治的拠点化を完成していることから、七尾南湾地域の港灣的役割が万行遺跡の発見により、さらに遡る可能性高まった。佐味今田谷内古墳群は、万行遺跡から東に1キロ離れた丘陵部に所在する古墳群で地理的には矢田高木森古墳と三室まどがけ古墳の中間に位置する。

- 1) 『七尾港港湾統計年報 平成16年度』 石川県七尾港湾事務所
- 2) 1974 七尾市役所『七尾市史』「第四編 第6章 幕末の世相と明治維新」
- 3) 2003七尾市役所『新修 七尾市史』「第1章 飛鳥・奈良時代 第二節 能登の立国」
『万葉集』卷十七ー四〇二七

1999『図説 七尾の歴史と文化』「原始・古代 大伴家持と能登の海」

歌意「鳥総を立てて船材を伐るという能登の島山よ。今日見ると木立が繁っていて幾多の年月を経て何と神々しいことか。」とある。この歌謡は、能登半島にはヤマト政権の時代から舟木部が置かれ、造船が重要な生業の一つであったことを知った上で、家持が香島津から船に乗り、七尾南湾や西湾に浮かぶ島々から伐りだされる様子を確認したと推測されている。



写真2 佐味今田谷内2号墳から七尾港大田第二埠頭に停泊する豪華客船「飛鳥Ⅱ」を望む

第2節 歴史的環境

石川県内の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）は総数8,150箇所が知られている。時代別の割合は旧石器・縄文時代が12%、弥生時代5%、古墳時代45%、奈良・平安時代16%、中・近世12%、時期不詳が10%を占める。七尾市には1,355箇所が存在し、県内の市町では最も数が多い。¹⁾

以下、時代別の概説を述べる。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、県内でも発見例は少ない。能登においては、能登町不動寺公民館遺跡出土搔器や宝達志水と町の御館表採のナイフ・ブレイド、志賀町赤住遺跡群のナカノA遺跡では石器類と共に石器を製作した痕跡も発見されているが、七尾市内ではまだ発見されていない。

縄文時代においても、草創期・早期の遺跡は極めて少なく、前期初頭（約6,000年前）頃に遺跡数が増加し始める。この頃（県内では佐波式段階）は地球の温暖化が進み、現在よりも海水面が上昇した（縄文海進）時期と重なる。佐波遺跡は能登島佐波の能登島と七尾を結ぶフェリー発着場の近く、道路建設によって削られた斜面に包含されていたことから、遺跡の存在が知られ、調査が始まった。佐波式土器の特徴は、砲弾形の深鉢で水平または波状の口縁を持ち、底部は尖底・丸底が多い。文様は羽状縄文や刺突文、条痕文などがあり、内面に条痕文がみられるものもある。

他に縄文時代の代表的な遺跡として三引遺跡が挙げられる。七尾西湾、赤蔵山低丘陵裾部から平野部に位置する低湿地から縄文早期末～前期初頭に形成された貝塚が発見された。当時は遺跡の目前まで汀線が入り込む入り江状の景観を呈していた。貝層は10～30cm程度の薄層であるが、中から小動物や魚類・海獣類などの骨や貝殻、植物の種子などの有機質遺物、他には石斧・石鏃の他に約3,000個の石錘も出土している。骨角製の釣針やヤス状の刺突具も発見されており、当時の漁労活動の一端が窺える。赤浦湯を臨む台地に赤浦遺跡が存在した。遺跡の範囲は3haと推測されている。元々、地元住民には周知されており、後に研究者の知るところとなり、昭和27・28年に「九学会連合能登調査」の対象地として、万行遺跡とともに調査が行われた。その後、3度の調査が実施され、中期中葉上山田式から後期中葉酒見式に属する竪穴住居が3棟や土坑21基、貝塚や多くの縄文土器や石器が出土した。

弥生時代

大陸や朝鮮半島から伝播してきた稲作農耕は同時に様々な道具や技術・文化をもたらした。七尾市では、赤浦遺跡や小島六十苜遺跡で柴山出村式（弥生時代前期）の土器が出土している。小島六十苜遺跡から出土した土器は、条痕文が施された深鉢形の器形が大部分を占め、櫛歯状具による施文方法もみられないなど、非常に縄文的な要素が強い。縄文から弥生の過渡期に位置する柴山出村式I式に該当する。

七尾市内では中期に属する遺跡は少ないが、御祓川と鷹合川に挟まれた徳田丘陵（標高30～40m）上から、北陸地方で所見となる弥生時代中期（小松式）の方形周溝墓群が発見されている。方形周溝墓13基、土壙墓15基が確認され、最高所に最も大きな1号墳を配置し、計画的に造墓しており、また土壙墓には埋葬品の違いがあり階層性の存在が想定されている。

後期には遺跡数は急増する。特に後期後葉～古墳時代前期初頭に比定される遺跡が多い。二宮川流域では吉田経塚山遺跡や邑知地溝帯西側（七尾市街地西部）では国分高井山遺跡、地溝帯東側では矢田遺跡や万行遺跡などが挙げられる。矢田遺跡では法仏～月影式期のまとまった一括資料が出土しており、万行赤岩山遺跡からは床面積14㎡の竪穴建物跡から管玉原石が5個発見され、管玉製作の作業施設と考えられている。両遺跡とも、万行遺跡と近接した位置に存在している。

古墳時代

七尾市内には、多くの古墳群が存在する。万行遺跡の近辺で調査を実施した古墳を挙げると、前期には邑知地溝帯の西側北端にあたる独立丘陵に造営された国分尼塚1号墳（全長約52.5m）や国分尼塚2号墳（全長33m）²⁾が挙げられ、中期には市内で唯一円筒埴輪列が確認されている矢田丸山古墳（直径約42m：円墳）³⁾や続いて後期の矢田高木森古墳（全長59m：前方後円墳）⁴⁾、海岸部の方では三室まどがけ古墳群が存在し、ヤスなどの漁具も出土している。終末期には下町院内勅使塚古墳⁵⁾や対岸にある能登島の須曾蝦夷穴古墳⁶⁾がある。前期から終末期まで七尾市周辺に盟主的な古墳が造営される。しかし、前期に関しては邑知地溝帯西側の国分・徳田古墳群に集中しており石動山系では千野高塚古墳のみが確認されている。万行遺跡の大型建物群の造営者及び造営者の埋葬された古墳の存在も課題であったので、周辺の古墳を踏査した際に至近の距離にある佐味今田谷内古墳群の存在を把握していた。七尾湾、富山湾に面している地形上、製塩遺跡も多く、古墳時代から古代まで製塩土器を使った塩づくりが盛んになされている。土器製塩は弥生時代末～古墳時代初頭頃に能登半島の七尾南湾に伝わったと考えられており、時代によって製塩土器底部の形式が、倒盃形から棒状尖底形、丸底形、平底形と変遷している。古墳時代の終わりには半島一円に土器製塩が拡がる。弥生時代後期から続く代表的な集落遺跡として、地溝帯西側の徳田丘陵では約24棟もの竪穴建物が検出された国分高井山遺跡（弥生時代後期～古墳時代初頭）や本遺跡にも近い矢田遺跡（弥生後期、古墳時代中・後期）⁷⁾、長頸鍬が一括して竪穴建物から出土し、東北遠征の兵站基地と推定されている万行赤岩山遺跡（古墳時代後期）などがある。

古代（奈良・平安時代）

7世紀後半頃まで古墳が造営され、白鳳期には地方豪族が氏寺を建設する。能登国においては羽咋市の柳田シャコデ廃寺、国分寺の前身である国分廃寺が確認されている。能登国は、養老2年（718）に越前国から羽咋郡・能登郡・鳳至郡・珠洲郡の4郡が独立し、能登国となった（第一次立国）。しかし、天平13年（741）越中国に併合されるが、天平勝宝9年（757）再び分立し、能登国が成立する（第二次立国）。能登国分寺は聖武天皇が国分寺建立の詔を発してから、遅れること102年、承和10年（843）に「大興寺」を昇格させて国分寺としている。能登国分寺の調査は大正11年上田三平氏により発掘調査が行なわれ、以後市史編纂事業や史跡指定を目指した発掘調査が進められ、昭和49年に国分寺としては39番目の国史跡となる。平成4年（1992）には「能登国分寺公園」として往時の姿に甦った。平成19～23年度にかけて、能登国分寺跡の寺域を確認するための調査を実施し、寺域の西側を特定する成果があった。国分寺の周辺には、国分寺の瓦と同範の瓦が出土している千野廃寺跡、外区に鋸歯文のある軒丸瓦が出土した小池川原地区遺跡、古府タブノキダ遺跡（7C後半掘立柱建物群）、八幡昔谷遺跡（奈良時代の倉庫群）、小島西遺跡（律令祭祀場、鹿嶋津の関連遺跡）などの遺跡が分布している。

近年、能登国分寺跡、国府推定地周辺において発掘調査が実施されており、古府ヒノバンデニバン遺跡では「市殿」と墨書された須恵器から国府市の存在が浮かび上がる等の能登国の古代の様相を知る新発見が続いている。

中世（鎌倉・室町時代）

鎌倉前期の承久3年（1221）に国衙が作成した「能登国大田文」には国内の荘園・公領（国衙領）の公田数が列記してあり、その中に万行保が記載してある。万行保は在庁官人系の武士で、国衙近傍の万行保を開発して保司となり、やがて同保の地頭に転じて鎌倉御家人に列していたと云われる。屋敷地は万行町の小字「竹端」地区に推定されている。現在の市街地周辺には中世の守護所が置かれ、応永15年（1408）に満慶を初代とした能登守護畠山氏が創設され、二代義忠時代には、度々歌会を開

催し、優れた文芸活動は評価されている。三代義統、七代義総時代に段階的に山上に七尾城が築造され、城山の山麓部に城下町が造営される。しかし、戦国時代の動乱の中、家臣の内紛もあり、天正5年（1577）に上杉謙信に滅ぼされる。その後、天正9年（1581）織田信長方の前田利家が能登国を与えられ、一時七尾城に入るが、港に近い小丸山に城を築くように普請した。天正11年（1583）には居城を金沢（尾山）に移す。

近世（江戸時代）

利家が金沢に移った後、小丸山城の本格的整備に取り組み、在城したのが利家の三兄安勝で七尾城代が続くが、元和元年（1615）の一国一城令によって翌年廃城になり、以後所口奉行所が能登の統治を引き継ぐことになる。

1) 石川県教育委員会 2003「いしかわの文化財」

2) 全長約52.5m、後方部一辺約28m、後方部平坦面一辺約18m、前方部幅約20m、くびれ部幅約7m、くびれ部上面幅約5.5mを測り、高さは後方部の南側で約3.8m、前方部東側で約3mである。前方部は低く、細いくびれ部から前端部にかけて大きく広がるタイプである。埋葬施設は墳丘築造過程において造成した構築墓坑で痕跡から長さ約4.7m、幅約1mの割竹形木棺が安置されていたと考えられる。特殊な例として棺床を取り囲むように木組みの配置がされていた。墳丘の後方部平坦面及びくびれ部から供献された土師器がまとまって出土しており、時期は古墳時代前期初頭の古府クルビ式の新段階に属する。棺内からは多くの副葬品が出土しており、特に北半分に集中していた。「雙風鏡」や異形勾玉（ヒスイ製）、管玉、鉄刀、鉄短剣、鉄槍先、靱、銅鏃、鉄斧、鉄槍鉋、ヤスなどが出土している。前方後方墳の形式を採るが、長大な割竹形木棺を採用し、銅鏡や多数の銅鏃を服装するなど、畿内大和勢力との密接な関係が指摘される一方、独自の内部構造を有している点が注目される。

1号墳の北側に並んで2号墳が造営される。全長33m、後方部一辺約18m、前方部幅約11m、後方部高さ約3.5m、前方部高さ約1m。埋葬施設は、簡素な木棺直葬で小型倣製鏡（国産鏡）、管玉20点、ベンガラ、小型鉄片が副葬されていた。

七尾市役所 2002『新修 七尾市史 1 考古編』

3) 正円形プランをなす復元全長42m、高さ7.5mを計る大型円墳。現状は、道路や民家によって墳丘裾部は削平を受け、崩落などもみられる。1969年に墳丘実測と墳丘斜面での埴輪・葺石などの確認調査を実施しており、埴輪片約30点を採取・発掘している。主体部は未調査。5世紀後半頃の造営で高木森古墳に先立つ盟主墳として位置付けられる。七尾市役所 2002『新修 七尾市史 1 考古編』

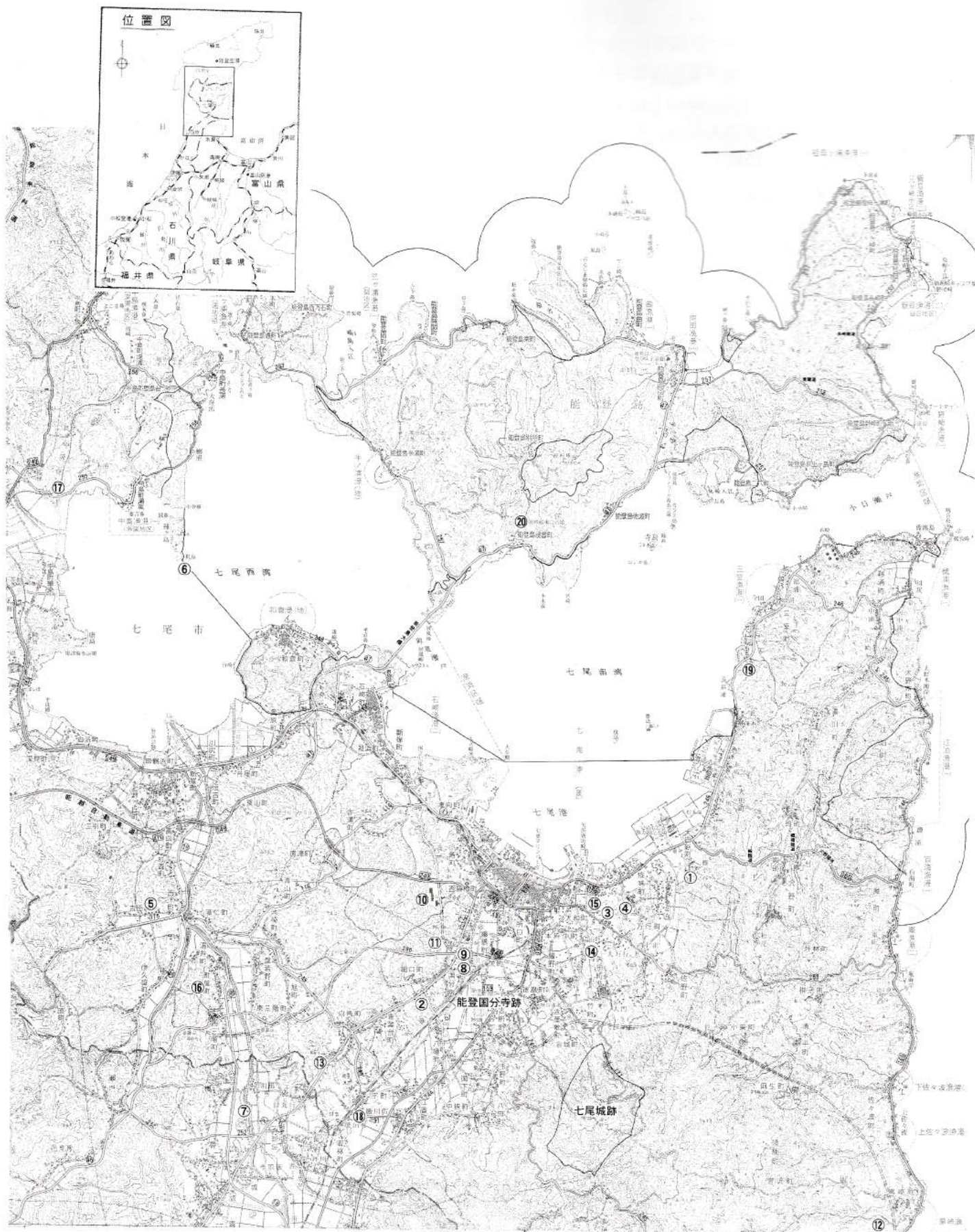
4) 海岸線に平行して台地の先端部に位置する。1958年明治大学考古学研究室と石考研によって共同調査を実施。復元全長59m、後円部径34.5m、同高さ約7m、前方部前端幅21mで後円部との比高差約2.5mの古相を示す。段築・葺石・埴輪は未確認。主体部は盗掘を受け、副葬品は発見されなかったが、墳丘のトレンチからは須恵器の杯蓋や丁寧に波状文を施した壺や裝飾器台が出土。

矢田古墳群は七尾市域最大の古墳群であり、その盟主的存在と考えられている。

5) 市街地の南西約6kmの距離にある。能登国造の墓と考えられ、江戸時代には既に開口しており、石棺や副葬品は伝わっていない。1969年に市史編纂事業で墳丘及び石室の実測、周溝のトレンチ調査を実施し、一辺約23mの方墳で幅約6mの周溝が確認されている。高さ3.7m。石室全長11.84m、玄室長4.62m、同幅2.50m、同高さ2.0m。墳丘は盛土を互層にして叩き締める版築工法によって造成される。時期は7世紀Ⅱ四半期。七尾市教育委員会 1985『院内勅使塚古墳』

6) 七尾湾を望む丘陵上に位置する。7世紀中頃に築造された方墳で、一辺が東西18.65m、南北17.05mを測る。墳丘には雄穴（T字型）、雌穴（逆L字型）と呼ばれる2つの横穴式石室が併設されており、板石がレンガ状に積み上げられ、天井は隅三角持ち送り技法のように築造されている。遺物は鉄鏃・ほぞ穴鉄斧・象嵌円頭大刀、鉄釘、須恵器などが出土している。能登島町教育委員会 2001『史跡 須曾蝦夷穴古墳 II』

7) 万行遺跡の東南方約1kmの水田地内に位置する。1985年に圃場整備事業に伴い、Aトレンチ（幅3m、長さ240m）、Bトレンチ（幅3m×長さ168m）の2本設定し、計1,300㎡の発掘調査をした。幅約5mの小河川下層から出土した木器や土器は出土状態から一括性が高く、弥生時代後期後半の基準資料となっている。他に古墳時代中・後期の資料も出土しており、中でも特筆すべきものに陶質土器が挙げられよう。天井部に綾杉状の刺突文が施された有蓋高杯の蓋や外面に擬格子叩き目、内面に同心円文がかすかに残る甕胴部片などが7点出土している。朝鮮伽耶地域の影響を大きく受けた土器で能登では他に発見例はない。かほく市指江遺跡で陶質土器が発見されている。



第1図 周辺の遺跡 (S=1/100,000)

表1 周辺の遺跡地名表

No.	遺跡No.	遺跡名	所在地	通称	種別	現状	立地	時代	出土品	備考										
①		佐味今田谷内古墳群	佐味町	イマダヤチ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳後期	須恵器、土師器、ガラス玉、鉄刀茎、長頸鍬	1: 前方後円墳(29m) 2: 円墳(30m) 3: 円墳(11m)										
②	02082	細口源田山遺跡	細口町八幡町	ゲンダヤマ	集落跡墳墓	宅地 山林 自動車学校	台地	弥生中期後半 奈良平安 室町	土器、管玉、石鏃 土師器、須恵器、珠洲焼、灯明皿	方形周溝墓、土壙墓、堅穴。 1977年 自動車学校建設の際発見。										
③	02205	矢田遺跡	矢田町		散布地	宅地 畑 道路 工場	平地	弥生前期末～ 中期初頭・ 後半、後期後半 古墳後期前半	有孔円板形石製品、 土器 土師器、須恵器、木器 カマド型土製品、韓式系 土器											
④	02210	万行赤岩山遺跡	万行町	アカイワヤマ	集落跡	宅地 畑 道路 公園	微高地	縄文前期後半 弥生末～古墳 前期 古墳後期	土器 土器、管玉、砥石 土師器、須恵器、長頸鍬	堅穴、掘立柱建物。										
⑤	31052	吉田経塚山墳墓群	吉田町	キョウゾカ 山	墳墓	山林	丘陵尾根	弥生 古墳 南北朝室町	土器(甕)、勾玉、管玉、 ガラス玉、 土師器(甕、壺、高杯)、 土器	台状墓墳頂に溝と石組みによる 中世祭祀遺構あり。										
⑥	33102	机島1号墳	中島町 瀬嵐		古墳	山林	台地	古墳前期初		前方後方墳(全長18m)。										
⑦	32084	大槻11号墳	中能登町 大槻		古墳	山林	丘陵	古墳前期初	土師器	前方後方墳(全長27.7m)。										
⑧	02088	国分尼塚墳墓群	国分町	アマツカ	古墳	山林	台地	古墳前期末	< 棺内 > 藪、銅鏃、鉄鏃、 鍬先、鉄斧、鉋、ヤス、 銅鏡、勾玉、管玉、直刀、 鉄剣、鉄槍 < 棺外 > 鉄槍、漆製品	前方後方墳(長52.5m) 木棺直葬(木組施設あり)、周溝。										
国分尼塚1号墳		古墳前期末									銅鏡、管玉、鉄器	前方後方墳(長33m) 木棺直葬、周溝。								
国分尼塚2号墳																				
⑩	02109	藤橋ゼニガミネ古墳	藤橋町	ゼニガミネ	古墳	山林	丘陵頂	古墳中期	刀子、須恵器甕	円墳(径40m)										
⑪	02092	国分高井山古墳群	国分町		古墳	山林 砂利採取場		古墳中期	鉄矛、直刀、鉋、鉄斧、 砥石、須恵器、滑石紡錘 車、銅鏡、鉄器	円墳3基 方墳2基										
⑫	02021	花園丸山古墳	花園町	カミツカ マルヤマ	古墳	畑 荒地	丘陵斜面	古墳中期	土師器壺底部	円墳(径47m、高6.4m)、二段 築成。 円墳(径13m、高1m) 円墳(径10m、高1m)										
⑬	02032	白馬ナブラ山古墳	白馬町		古墳	山林	丘陵	古墳後期	須恵器(甕、提瓶)、 土師器(把手付碗、長頸 壺)	円墳(径13.5m、木棺直葬)										
⑭	02200	矢田丸山古墳	矢田町	マエガワ	古墳	社地		古墳中期	円筒埴輪	円墳(径32m、高7.5m)、復元 径42m、1969年一部発掘調査。										
⑮	02206	矢田高木森古墳	矢田町	ネコツカ	古墳	社地 雑林	微高地	古墳後期初頭	須恵器、土師器、 石室用材	前方後円墳(長58m)、 堅穴式石室か。										
⑯	02050	温井15号墳	町屋町		古墳			古墳後期前半	< 棺内 > 刀子、鉄鏃、ガ ラス玉 < 墳丘 > 鉄斧、須恵器	前方後円墳(長16.8m、後円径 10.8m)、木棺直葬。										
⑰	33078	中島ヤマンタン古墳群 中島ヤマンタン1号墳 (ハリ塚古墳)	中島町 中島	ヤマンタン (不動滝古 墳)	古墳	山林	丘陵端	古墳後期	土師器、須恵器、鍬先1、 鎌1、直刀片4、金環2、 刀子5、切子玉5、管玉0、 ガラス勾玉5	墳丘割平 円墳(径8m、高0.8m)。 横穴石室の石材集積。										
中島ヤマンタン 31号墳		シモ		丘陵			金銅製鞘止具、鍔付直刀 1、直刀7、刀子8、鉄鏃 13、方形鉄板1、ガラス 小玉8、緑色凝灰岩小玉 186、朱、人骨片、須恵 器(蓋杯、高杯、平瓶、壺、 はそう、提瓶各1)		円墳(14m、高3m)。 横穴式石室(玄室長7m、幅 1.5m、高1.3m)。											
⑱	02025	院内勅使塚古墳	下町	チヨクシツ カ	古墳	公園	微高地	古墳終末期	須恵器(杯蓋、杯身、高杯、 はそう)	方墳(辺23.4m、高3.5m)、 二段築成、横穴式石室(長 11.8m)。										
⑲	02230	三室まどがけ古墳群	三室町	マドカケ	古墳	山林	丘陵尾根	古墳後期	鉄鏃、管玉、ガラス玉、刀、 刀子、馬具類、酸化鉄、 人骨、金環、銀環、須恵器、 土師器	円墳(径20m)、横穴式石室 (長9m、両袖形)、玄室北側壁 に線刻。										
		三室まどがけ1号墳									公園	丘陵尾根	古墳後期	刀子、弓金具、ヤス、釣針、 耳環、空玉、鉄鏃、須恵器、 土師器	円墳(径12m)、 横穴式石室(長5.5m、無袖形)。					
		三室まどがけ2号墳														公園	海岸	古墳終末期	耳環、須恵器、土師器	円墳、横穴式石室
		三室まどがけ3号墳																		
⑳	35064	須曾蝦夷穴古墳	能登島 須曾町	エゾ穴	古墳	史跡公園	丘陵	古墳終末期	土師器、須恵器、 鉄製銀象嵌円頭大刀、 ほぞ穴鉄斧、刀子	方墳(東西21m、南北17m)、 横穴式石室2基(雄穴T字形、 雌穴逆L字形)。										

第3章 調査の成果

第1節 調査区割り

1号墳の中軸線(南北ライン)を設定し、3級基準点・4級基準点、1号墳及び周囲に便宜的にグリッド杭を設定した。東西軸は東方向に1・2・3・4とアラビア数字を付け、南北軸は南方向にA・B・C・D・Eと付けた。出土遺物については、基本的に墳丘測量図にドットを落とし、取り上げた。標高は東京湾平均海水面(T. P.)を基準とした。2号墳については、1号墳の中軸線と同じ方位を援用して中軸線を設定し、トレンチ調査を実施。古墳および周辺の地形をマップデジタル化及び墳丘測量を実施した。

第2節 1号墳(前方後円墳)

1号墳は、丘陵の北西端に位置し、西側と北側は急斜面な谷地形となっている。前方後円墳の調査を最初に実施。樹木を伐採し、見通しは良くなったが、墳形を正確に把握するための伐採、下草刈りに多くの労力がかかった。1号墳の後円部主体部は大きく盗掘を受けていることは、以前から確認できており、また後円部南西部など削平された状況もうかがえた。後円部の墳丘は高く、前方部の墳丘が低平な矢田高木森古墳と似た墳形を呈しており、前方部東には墓石があり、墳丘の一部が改変されていた。

墳丘表面の掃除を実施したところ、遺物の散布が見られた。特に後円部の墳頂部を中心に北・東・西の墳丘斜面に板石が散在し、埋葬施設との関連がうかがえたが、寸法も小さく、出土量も多くはない。土師器以外に、弥生土器・縄文土器も僅かに散見され、古墳以前の暮らしも推測できた。

1号墳の墳丘上での遺物の出土状況は、被葬者を埋葬した際の葬送儀礼の痕跡を復元できる可能性も考えられたため、出土ポイントにピンホールを挿して、ナンバリングをして遺物を取り上げた。必ずしも、1点ずつナンバリングをしているのではなく、場合によっては周辺に散布する(半径約50cm以内)遺物をまとめて取り上げた。(平成25～26年度に実施。平成27年度については、草刈や清掃、自然条件で原位置から大きく移動していると推測される場合には、番号は付けていない。)

1号墳・2号墳を通して1から70番までの出土ポイントがあった。(第2図参照)ほとんどが1号墳での出土である。

1) 出土遺物の分布

墳頂部は盗掘により、東部分は削平を受けており、西側の方が墳丘は高い。現況から判断すれば、東側寄りに埋葬施設が存在した可能性が考えられた。墳頂中心部分に大杉があり、伐採後に根元周辺の攪乱を清掃して、西側の墳丘土層の確認を試みたものの、表面観察のみに留まった。かなり軟質の土層であったため、盗掘の際の廃土の可能性も考えられた。

後円部からは、安山岩質の板石が多く出土している。これは、三室まどがけ古墳群や矢田高木森古墳の石室の床石に使用されたものと同じの石材と推測され、能登島須曾蝦夷穴古墳近くの海岸部で採取され、同古墳にも使用された石材と思われる。ただし、大きいものでも20cm程度で小片の板石がほとんどである。墳丘の東側から南側にかけて15点ほどの板石が墳頂から墳裾にかけて出土している。また、後円部墳頂の北から前方部及び東西くびれ部付近で20点程の板石が出土しており、その分布状況から後円部に使用されていたことが類推され、盗掘の際に散在したような出土状況と想定できそうである。土師器片は多く出土しているが、ほとんどが細片で甕が多い。他に壺・鉢が

第3章 調査の成果

第1節 調査区割り

1号墳の中軸線(南北ライン)を設定し、3級基準点・4級基準点、1号墳及び周囲に便宜的にグリッド杭を設定した。東西軸は東方向に1・2・3・4とアラビア数字を付け、南北軸は南方向にA・B・C・D・Eと付けた。出土遺物については、基本的に墳丘測量図にドットを落とし、取り上げた。標高は東京湾平均海水面(T. P.)を基準とした。2号墳については、1号墳の中軸線と同じ方位を援用して中軸線を設定し、トレンチ調査を実施。古墳および周辺の地形をマップデジタル化及び墳丘測量を実施した。

第2節 1号墳(前方後円墳)

1号墳は、丘陵の北西端に位置し、西側と北側は急斜面な谷地形となっている。前方後円墳の調査を最初に実施。樹木を伐採し、見通しは良くなったが、墳形を正確に把握するための伐採、下草刈りに多くの労力がかかった。1号墳の後円部主体部は大きく盗掘を受けていることは、以前から確認できており、また後円部南西部など削平された状況もうかがえた。後円部の墳丘は高く、前方部の墳丘が低平な矢田高木森古墳と似た墳形を呈しており、前方部東には墓石があり、墳丘の一部が改変されていた。

墳丘表面の掃除を実施したところ、遺物の散布が見られた。特に後円部の墳頂部を中心に北・東・西の墳丘斜面に板石が散在し、埋葬施設との関連がうかがえたが、寸法も小さく、出土量も多くはない。土師器以外に、弥生土器・縄文土器も僅かに散見され、古墳以前の暮らしも推測できた。

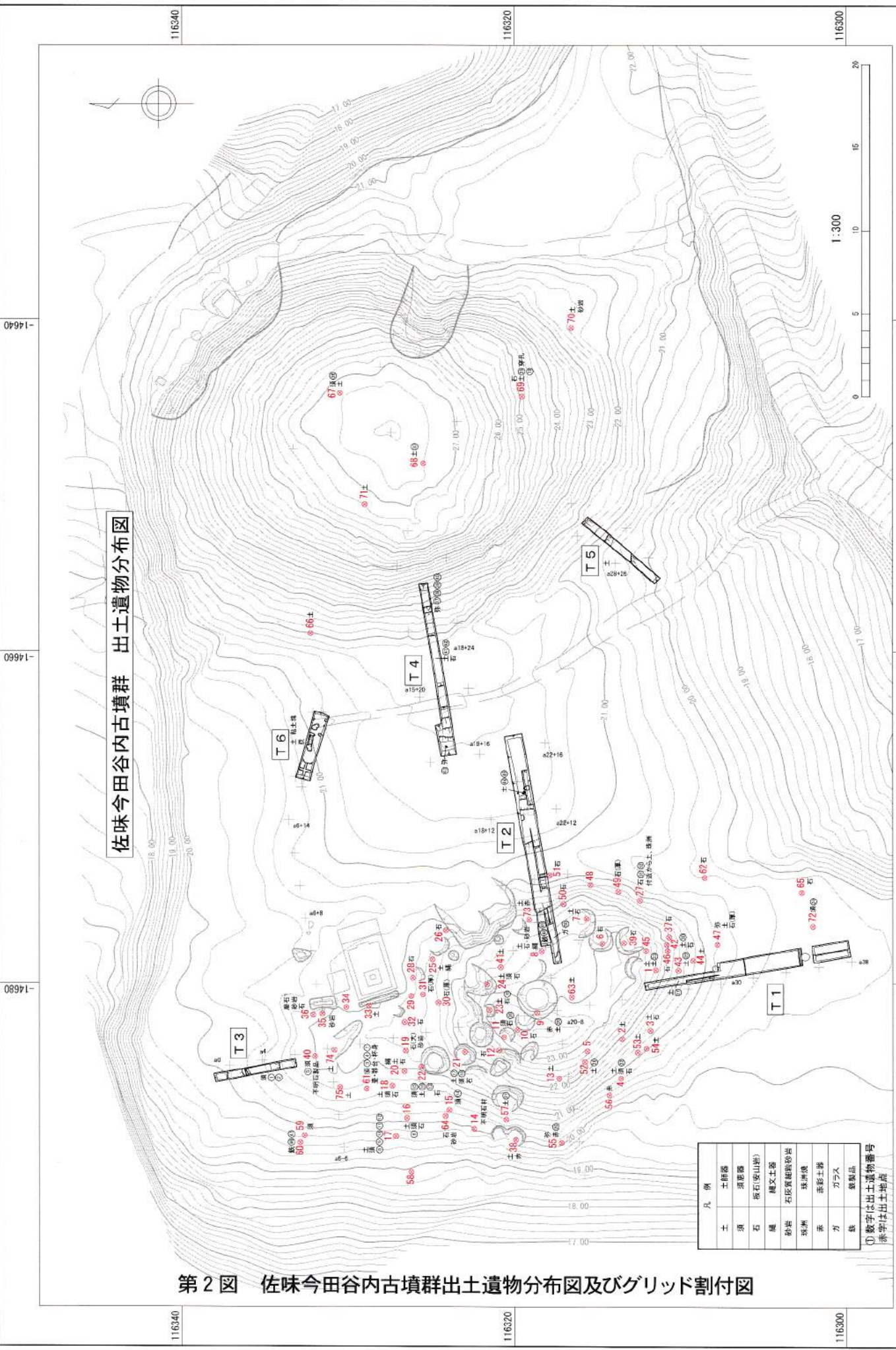
1号墳の墳丘上での遺物の出土状況は、被葬者を埋葬した際の葬送儀礼の痕跡を復元できる可能性も考えられたため、出土ポイントにピンホールを挿して、ナンバリングをして遺物を取り上げた。必ずしも、1点ずつナンバリングをしているのではなく、場合によっては周辺に散布する(半径約50cm以内)遺物をまとめて取り上げた。(平成25～26年度に実施。平成27年度については、草刈や清掃、自然条件で原位置から大きく移動していると推測される場合には、番号は付けていない。)

1号墳・2号墳を通して1から70番までの出土ポイントがあった。(第2図参照)ほとんどが1号墳での出土である。

1) 出土遺物の分布

墳頂部は盗掘により、東部分は削平を受けており、西側の方が墳丘は高い。現況から判断すれば、東側寄りに埋葬施設が存在した可能性が考えられた。墳頂中心部分に大杉があり、伐採後に根元周辺の攪乱を清掃して、西側の墳丘土層の確認を試みたものの、表面観察のみに留まった。かなり軟質の土層であったため、盗掘の際の廃土の可能性も考えられた。

後円部からは、安山岩質の板石が多く出土している。これは、三室まどがけ古墳群や矢田高木森古墳の石室の床石に使用されたものと同じの石材と推測され、能登島須曾蝦夷穴古墳近くの海岸部で採取され、同古墳にも使用された石材と思われる。ただし、大きいものでも20cm程度で小片の板石がほとんどである。墳丘の東側から南側にかけて15点ほどの板石が墳頂から墳裾にかけて出土している。また、後円部墳頂の北から前方部及び東西くびれ部付近で20点程の板石が出土しており、その分布状況から後円部に使用されていたことが類推され、盗掘の際に散在したような出土状況と想定できそうである。土師器片は多く出土しているが、ほとんどが細片で甕が多い。他に壺・鉢が



第2図 佐味今田谷内古墳群出土遺物分布図及びグリッド割付図

ある。また、赤彩の高杯片も後円部を中心に8点出土している。

土師器は後円部の中腹部で採集できた。後円部の全般的に散在しているが、北側から前方部、西側くびれ部にかけてやや集中して出土している。器種は甕・壺・鉢・高杯。

須恵器については、後円部全体で6点の須恵器甕片が出土しているが、墳頂部では1点(24)出土。須恵器が比較的まとまって発見された地点は、前方部の西側からくびれ部(15・16・17・18・22)と前方部北端(40・T1)で、前者では非常に密集して、しかも細片で出土している。器種は甕、壺(台付)、高杯、杯身、装飾器台また高杯(波状文)、いずれも細片のため復元は難しいが、この出土状況から考えられる姿は盗掘の結果ではなく、墳丘で行われた墓前(上)祭祀状況が復元できそうである。後円部と前方部が接する主軸より西側のくびれ部での出土は、祭儀後に人為的に破碎している状況がうかがえる。この状況と似た例が矢田高木森古墳でも見られる。高木森古墳の後円部に寄ったくびれ部の鞍部表土層中から多量の須恵器と少量の土師器が発見され、埋葬時(直後か)に行われた葬送儀礼の場だったと推定されており、これらの土器は葬送による供献用土器であり、祭儀終了後に人為的に破碎散布していることから、後期初頭の盟主的な前方後円墳における墓前祭祀の様相がうかがえる事例と報告されている。1号墳においては出土量は少量であるが、葬送に関わる供献用の土器である可能性は考えられる。

後者については、須恵器甕・波状文のある台付壺か、高杯または器台(透孔)が復元できる。前者と一連の供献用土器なのか、別の可能性も考えられる。

少量だが、海石(石灰質細粒砂岩)の散布がみられる。前方部北東部に見られたが、現在墓石があるように後世に墓地として利用されていた痕跡の可能性もあるが、海石は板石と同様に矢田高木森古墳や三室まどがけ古墳でも石室の構造材として使用されていることから、埋葬施設に使用されて石材としての可能性も考えておきたい。

2) トレンチ1(平成26年度調査)

後円部の墳形を確認するため、後円部の南側に設定。南北の中軸線に沿って、墳裾(周溝)に推される地点に幅1m、長さ5mのトレンチを設定し、さらに北側(墳丘側)に幅0.5m、長さ4.8mのトレンチと南側に長さ2m、幅1mのトレンチを設定した。トレンチ最高所の標高は22.3mで最も低い南端との比高差は2mである。

墳丘の表土を丁寧に検出しながら調査を進めた。表土を剥いで、②・⑥層を丁寧に精査しながら、掘り下げる。当初、墳裾には周溝の存在も想定していたが、検出できなかったため、さらに南にトレンチを拡張して調査したが、周溝及び区画溝は発見されなかった。杉根の攪乱もあったが、平面及び断面では明確に確認することは困難であった。そこで、墳丘の築造方法から墳裾を確認するために、墳丘側のトレンチを拡張した。北端では②層直下に旧表土と思われる③層が確認できた。その下からやや締まった④層(にぶい黄褐色粘質土)を検出。やや南側のa28グリッドラインから断ち割りを入れて、土層を確認した。④⑤⑦⑧層からは遺物も出土しておらず、きれいで締まっていることから、地山(基盤層)に近い所と想定し、直上に古墳以前の旧表土(③層)が存在している状況が考えられた。墳丘自体は外観からも削平されているため、トレンチからは、ほとんど遺物は出土しておらず、表土から土師器3点、赤彩高杯1点、砂岩片と赤彩高杯(27)が出土しているのみである。

3) トレンチ2(平成26・27年度調査)

後円部の墳形及び周溝を確認するために、当初は後円部の東側傾斜面に設定。後に東西に拡張した。長さ13m、幅1mを測り、西側に幅0.5m、長さ1mの拡張トレンチを設定。墳頂部で標高22.8mを測る。

墳丘東側は道の痕跡があり、前方部に所在する墓石の造成時の作業道や大田町藤平谷内に抜ける旧道として利用されたようで、墳丘も造成時に削られている状況は窺えた。また、1号墳の東側、2号墳に付随するように南北約18m、東西約13mの長方形の土壇状の高まりが存在した。2号墳の

墳丘の一部の可能性も含めて確認するためにトレンチを設定した。

平成26年度は、墳丘中腹から幅50cmで東側にトレンチを拡張しながら調査を実施した。墳丘は削平を受けるが、作業道の下は落ち込んでおり、周溝の窪みが道となった印象も受けた。落ち込みは、トレンチ西端から6.2mの地点で東側に緩やかに立ち上がり、さらに地山が東側に落ち込んでいく土層が確認できた。1号墳または2号墳に伴う周溝か、それとも古墳以前の遺構なのか判断が出来なかったため、次年度に調査を持ち越すこととし、一旦トレンチを埋め戻した。

平成27年度に引き続き調査を実施した。トレンチが狭小であったため、幅を1mに拡張し、溝の時期と性格を押さえるために調査を進めた。長方形の土壇は溝が埋没後、時間を経てから盛土造成した比較的新しい造作であることが、トレンチ4の調査からも判断できた。また、この落ち込みも2号墳の周溝の可能性が高いことも同様にわかった。周溝の底部は根などの攪乱の影響もあり、地山との境も不明瞭な部分もあったが、深さ60cmを測り、底はフラットである。最下層に⑩層（褐色粘質シルト）が44cm堆積しており、炭が混じる。土師質の細片5点、赤彩1点、安山岩の板石2点が出土している。また、西側落ち込み際に土師器の壺（44・45）一部がまとまって出土していた。直上に硬く締まった黒っぽい⑨層炭混じりが水平に堆積していた。土師器片6点出土。他に炭、小礫が出土。その上の⑥層も厚さ14cmで堆積する。③層は盛土。溝の埋土は底が平坦なためか水平に堆積している。⑩層は、30～50cmの厚さで意図的に埋めたような堆積状況であり、⑨層はその後に形成された旧表土と理解したい。⑥層は堆積した土層というより整地をしたものと思われる。

墳頂部

後円部墳頂は盗掘の痕跡があったが、埋葬施設が存在する可能性があったため、慎重に掘り進めた。まずは、墳丘の中腹から墳頂に向かって調査を進め、標高21.8mの高さで黒褐色の旧表土（⑤層）を検出（遺構の可能性もある）。断ち割りにより、⑤層の下は地山（⑦層：にぶい黄褐色土で固い）となっていることを確認。墳頂部ではトレンチが狭いので、平面で遺構を把握することは困難であったが、⑤層の上は地山質の③層を堅緻に造成していることが分かった。表土直下の②層は柔らかく、精査中に僅かな土師器片や剥片に混じって、鉄刀の茎（48）とガラス小玉（50）が出土した。古墳以外の遺物も出土しており、出土状況も単発であったため攪乱と判断した。その下の④層は③層を切り込んで堆積しているようにも見えるが締まっていない土であった。ここからは、鉄製品（49）が出土した。調査時点では分からなかったが、後に長頸鎌（4点）の一部が鏽着したものだと言明した。

4) トレンチ3

前方部の先端部を確認するために、北端に長さ5m、幅0.5mのトレンチを設定した。トレンチ南端の標高は20.9m、北端で20.1mと0.8mの比高差しかない。トレンチの南側にはケヤキがあり、調査前には伐採したが、根が周囲に蔓延りトレンチ内にも太い根が伸びており調査は難航した。前方部は低平で墳形も不明瞭であった。表土を除去し、②層を精査。②層は墳丘盛土が流出して堆積したものと思われる。③層は地山ベースで盛土もしくはその流出土と想定しているが、やや軟質である。表土からこの層までは竹の根が繁殖しており、土色の差異が少ないため土層の判断は難儀だが、トレンチ北端から南に1mの地点にやや落ち込んだ部分（断面図の破線部）が確認できる。これを墳丘を区画する（周）溝として想定し、前方部の先端と理解したい。この部分に墳丘の竹根が猛烈に繁殖しているのは、柔らかい埋土に竹根が入り込んでいるためだと思われる。なお、地形は緩やかに北側に傾斜し、北に3mの辺りから崖地形となる。

5) 墳丘の築造方法

トレンチ3箇所成果から類推できるのは、トレンチ1と2で確認された黒褐色の旧地表面でこれより下は地山であると考えられる。この丘陵尾根は標高20mラインで平坦に整えられ、1・2・3号墳を築造している意図が窺える。古墳の設計図を元に縄張りをして、丘陵を削り出し、おおまかな墳形を作り出してから墳丘の上部を盛土成形したと推測される。ただし、墳丘の上部は攪乱や削

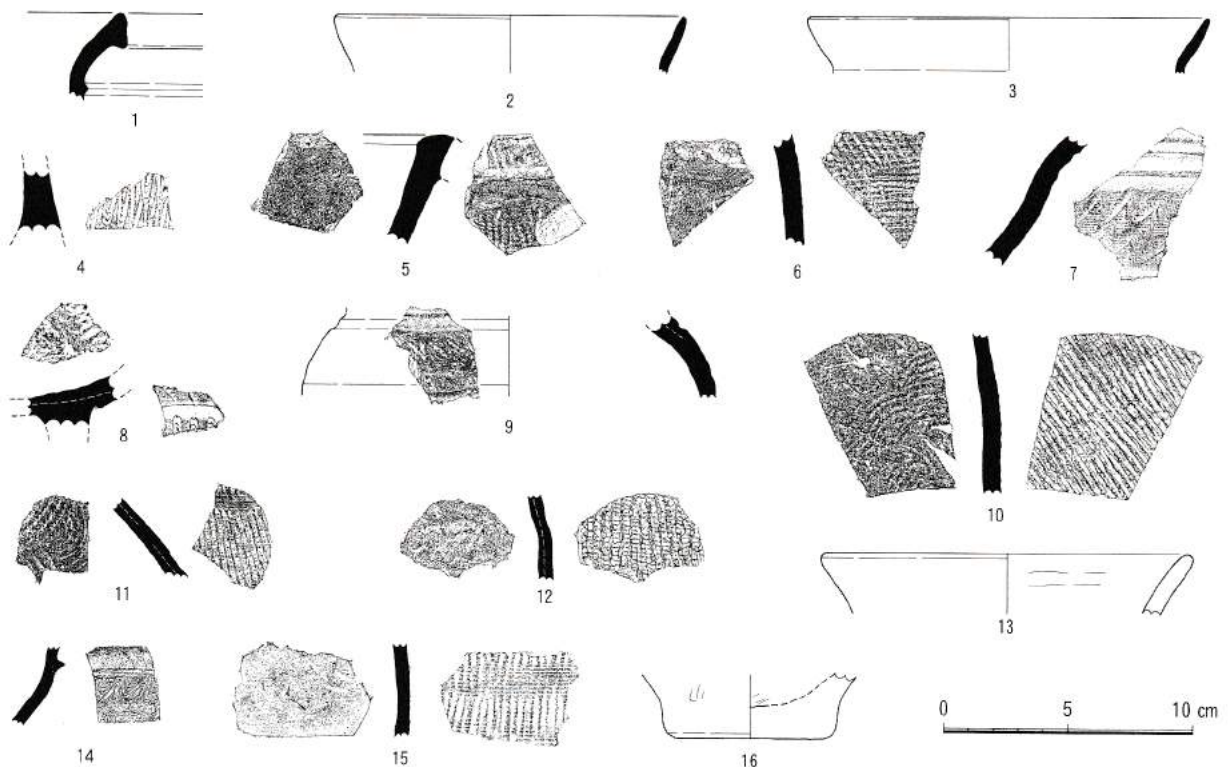
平のため、築造時に墳丘の中心部から土を被せていったのか、土手を築き土を充填していったか等、どのような盛土工法を採ったかは分からないが、墳丘上の表土も滑りやすく、トレンチ1の盛土も軟質であったので、後円部の南西部が崩れているのは、被せた盛土が軟弱で流出した結果なのかもしれない。後円部にあったと思われる埋葬施設の形態や構築方法も不明であるが、墳丘に散在する安山岩の板石や砂岩を用いた石室が推測される。

前方部については、地山成形をして盛土していると思われるが、盛土が流出している状況が確認できた。地山削り出しの段階で後円部が高く造られており、盛土の前後関係は不明だが、後円部を重要視して築造していると思われる。

6) 墳丘の復元

保存目的の最小限の調査範囲での確認調査だが、凡その規模・墳形を把握することができた。後円部、前方部とも削平や長年の風雨により墳形が変わっており、発掘成果から当時の築造規格まで類推する情報は極めて少ないが、敢えて復元するなら、南側は後円部トレンチ1の地山傾斜変化点、北側は前方部との接点、西側の谷地形では標高20mラインで東側は削平を受けているが、トレンチ2の溝状の落ち込みが辛うじて周溝の痕跡だと推定すれば、後円部径（推定）18.4m、後円部高（推定）2.4m、前方部長（推定）10.6m、前方部幅（推定）10m、前方部高（推定）0.4mが推定できる。前方部の先端は隅がやや広がる形状が復元できる。後円部の高さは東側墳裾からの数字である。西側の標高19.4mラインにテラス状の平坦面から観測すると後円部高（推定）4mとなる。

1号墳は、この丘陵の北西端に位置し、北・西側の麓からは谷地形を利用して、墳丘をより高く見せるような築造をしている。



第3図 1号墳前方部くびれ部出土遺物実測図 (S=1/3)

7) 遺物

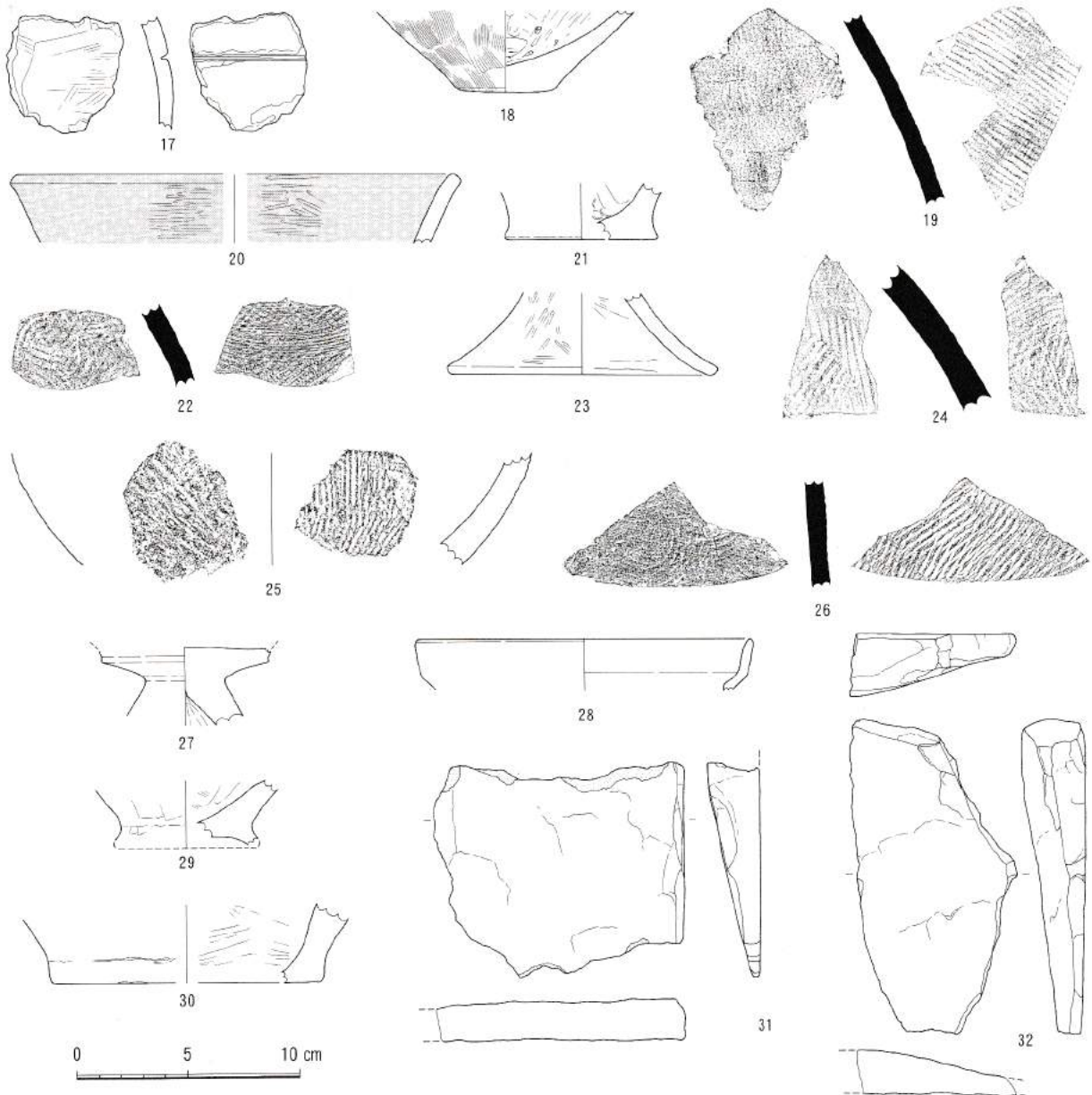
出土遺物は、表2遺物観察表を参照してもらい、ここでは特殊遺物についてのみ記述する。

48は鉄刀の茎で茎尻側は目釘孔部分で欠損、表裏面及び刀側に把木の木質が残存しており、柄装具への刀身の装着は背からの落とし込みによるものと判断できる。目釘孔は表裏両側から穿孔された可能性が高く孔内中央付近が狭くなっている。目釘は穿孔方向と並行する木目の木製目釘。柄の背側には、幅2mm程度の紐状の巻きつけが残存、素材は不明。分析では有機質を想定（Ag等検出されず）。

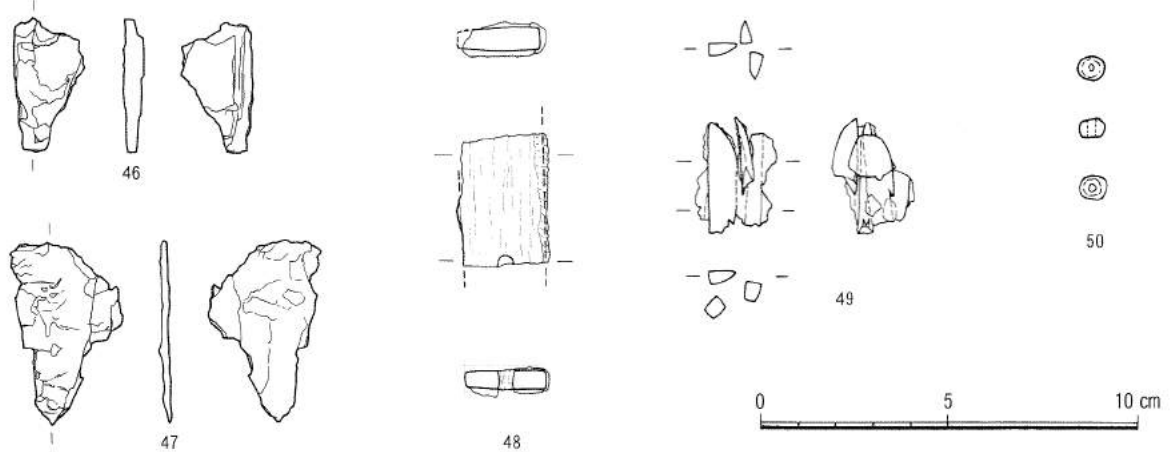
49は、長頸片刃箭式の鉄鏃で錆着により、判断が難しかったが、4点の固体が確認できた。残存長2.9cmを測る刃も残る。

50は、胴側面最大長7.5mm、小口最大径5.49mm、孔径2.22mm、重量0.3678gを測るガラス玉で基礎ガラス材質は「ソーダ石灰ガラス」でCo(コバルト)によるイオン着色がされている。

孔と平行方向に走る気泡列などから熔かしたガラス塊を管状に引き伸ばす「引き伸ばし管切技法」による製作である。



第4図 1号墳後円部出土遺物実測図 (S=1/3)



第5図 1号墳鉄製品・ガラス玉実測図 (S=1/2)

第3節 2号墳 (円墳)

丘陵の東端に築造されており、古墳群中最も墳丘が高い円墳である。現状は北東部が墓地として利用され幅10mほど墳裾が削平されている。その墓石の隣には五輪塔の残欠(砂岩)も残っている。南東部分も土取りのためか幅3.5m、長さ5m程度墳丘が削られていた。また、現況は南北に長い楕円状であるが、東西斜面が急傾斜であるため、改変されている可能性が考えられた。墳頂は残存長径9.2m、短径8.4mを測り、付近には盗掘坑も見当たらないことから、埋葬施設は遺存していると思われた。西側に存在する方形の土壇状の高まりも当初は造り出し等の可能性も考えた。

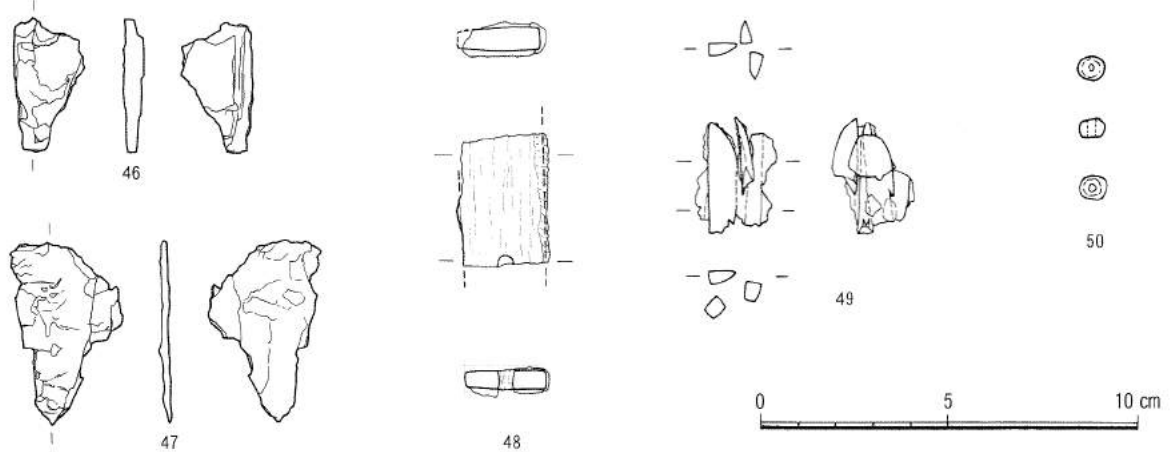
1号墳の調査でおよその規模・墳形・時期を把握することができたが、2号墳との前後関係が不明であったため、2号墳の正確な墳丘測量実測を行い、墳形をしっかりと把握し、合わせてトレンチ2で確認された落ち込みが周溝になるのかを確認するためにトレンチ4・5・6を設定した。

1) 出土遺物

1号墳と比較しても、2号墳から採集できた遺物は圧倒的に少ない。盗掘を受けていないことも一因でもあろうが、墳丘上で執行される葬送儀礼などの違いがあるのかもしれない。残存長径9.2m、短径8.4mの墳頂から採集できた遺物は10点も満たない。須恵器の甕(36)、土師器甕口縁部(33)、他土師器細片のみである。出土地点69からは、土師器の底部穿孔土器(35)や土師器高坏(34)、板石が出土している。

2) トレンチ4

2号墳の西側墳裾の確認とトレンチ2で発見された遺構の確認のために、墳丘から西側に幅0.5m、長さ8.5mを設定。落ち込みが検出されたため、西側に2m、幅1mのトレンチを拡張した。墳丘のある東側は竹の根が繁殖し、掘り下げるのもかなり難儀した。墳丘側の上層(㉔層より上)はほとんど竹根の影響を受けていたが、特に㉕層の竹根はひどく入り込んでいた。黒褐色の旧表土(㉔層)が標高22.5mラインで検出された。細片であるが弥生後期に比定される甕口縁部(37・38・39)が出土している。長さは1.3mのみ確認。1号墳の旧表土より0.6m程高く、古墳築造以前の様相は2号墳から1号のある西側に傾斜していく地形であったと推測される。墳丘は削平されて



第5図 1号墳鉄製品・ガラス玉実測図 (S=1/2)

第3節 2号墳 (円墳)

丘陵の東端に築造されており、古墳群中最も墳丘が高い円墳である。現状は北東部が墓地として利用され幅10mほど墳裾が削平されている。その墓石の隣には五輪塔の残欠(砂岩)も残っている。南東部分も土取りのためか幅3.5m、長さ5m程度墳丘が削られていた。また、現況は南北に長い楕円状であるが、東西斜面が急傾斜であるため、改変されている可能性が考えられた。墳頂は残存長径9.2m、短径8.4mを測り、付近には盗掘坑も見当たらないことから、埋葬施設は遺存していると思われた。西側に存在する方形の土壇状の高まりも当初は造り出し等の可能性も考えた。

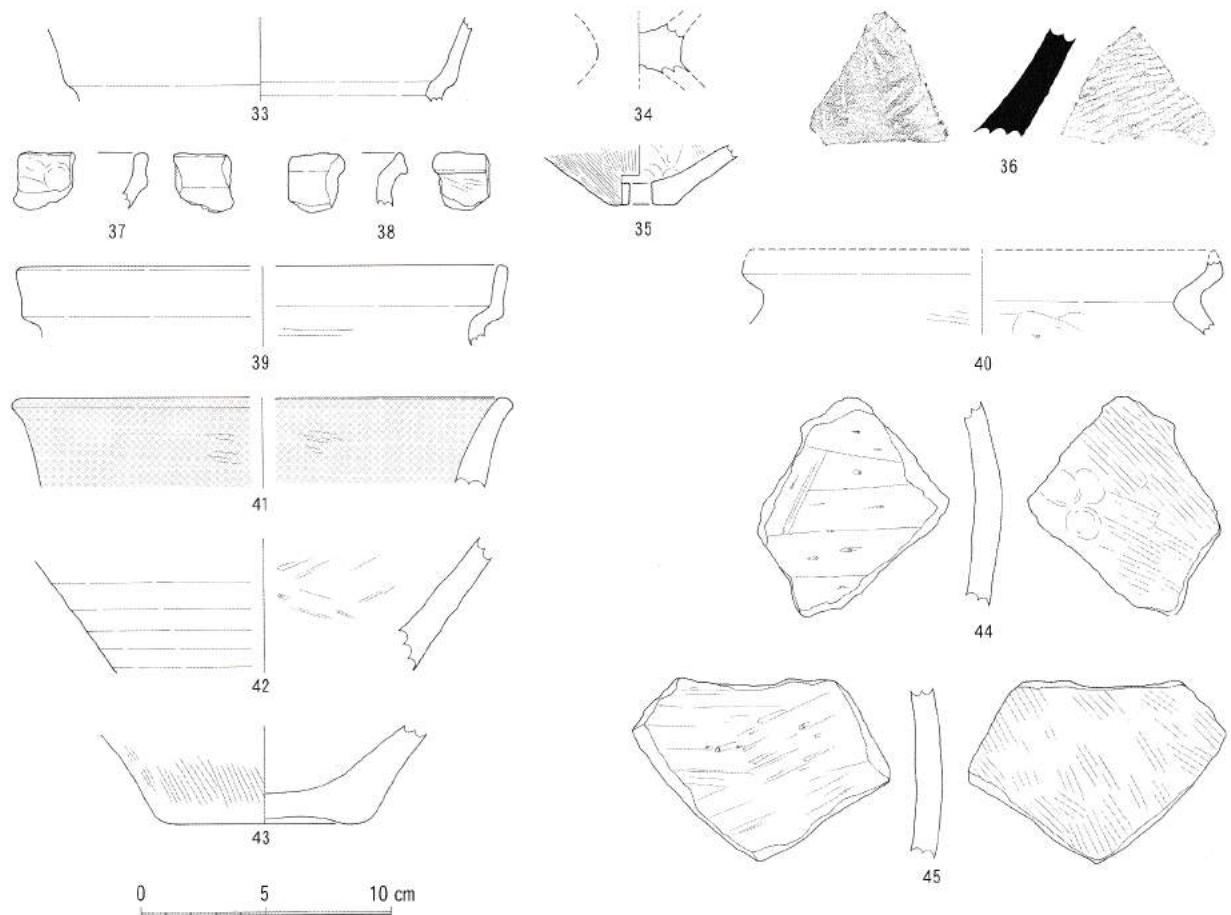
1号墳の調査でおよその規模・墳形・時期を把握することができたが、2号墳との前後関係が不明であったため、2号墳の正確な墳丘測量実測を行い、墳形をしっかりと把握し、合わせてトレンチ2で確認された落ち込みが周溝になるのかを確認するためにトレンチ4・5・6を設定した。

1) 出土遺物

1号墳と比較しても、2号墳から採集できた遺物は圧倒的に少ない。盗掘を受けていないことも一因でもあろうが、墳丘上で執行される葬送儀礼などの違いがあるのかもしれない。残存長径9.2m、短径8.4mの墳頂から採集できた遺物は10点も満たない。須恵器の甕(36)、土師器甕口縁部(33)、他土師器細片のみである。出土地点69からは、土師器の底部穿孔土器(35)や土師器高坏(34)、板石が出土している。

2) トレンチ4

2号墳の西側墳裾の確認とトレンチ2で発見された遺構の確認のために、墳丘から西側に幅0.5m、長さ8.5mを設定。落ち込みが検出されたため、西側に2m、幅1mのトレンチを拡張した。墳丘のある東側は竹の根が繁殖し、掘り下げるのもかなり難儀した。墳丘側の上層(24層より上)はほとんど竹根の影響を受けていたが、特に⑩⑭層の竹根はひどく入り込んでいた。黒褐色の旧表土(24層)が標高22.5mラインで検出された。細片であるが弥生後期に比定される甕口縁部(37・38・39)が出土している。長さは1.3mのみ確認。1号墳の旧表土より0.6m程高く、古墳築造以前の様相は2号墳から1号のある西側に傾斜していく地形であったと推測される。墳丘は削平されて



第6図 2号墳出土遺物実測図 (S=1/3)

おり、トレンチ東端から2mの地点には溝状の掘り込み(⑪⑭層)もあるが、2号墳の周溝ではなく、堆積状況からも後世の造成であろう。墳丘の流出土と思われる⑭層からは土師器壺(41・42)が出土している。作業道として利用されていたこともあり、一部攪乱も見られる。1号墳との間にある土壇は2号墳を削平した後に造成されているが、盛土(②③層)を見る限り、2号墳を掘削した土で造成しているとは考えにくい。トレンチ東端から西に8.1mの地点から落ち込みが確認され、トレンチ2の落ち込みと堆積状況も同じであることから、同一の遺構の溝と判断した。深いところで0.8mあり、最下層の⑧層から弥生土器壺底部(43)が出土している。出土した弥生土器は混入と推測され、古墳の墳形や検出位置を考慮すると2号墳に付属する周溝である可能性が高まった。④層は有機物を含み固く締まっており、一時期地表面になっているようである。

3) トレンチ5

トレンチ2と4で確認された溝(周溝)の延長と墳裾の確認のために南東部分に長さ5.7m、幅0.5mのトレンチを設定した。墳丘の土層は②③層は盛土もしくは流出土と推測され、明黄褐色の④層については地山質の層である。標高20.5mぐらいから白色粒が混じりの確実な地山(⑭層)が検出できる。地山以外は基本的に竹根が繁殖し、遺構検出及び分層には苦労した。トレンチからは小礫と長径4cmの礫石、土師器片5点が出土。墳丘表面は削平を受けているようであるが、地山の状況を平面と断面で観察するとおよそ標高20mラインで平坦になっており、地山を削り出して墳丘の基壇部分を造成しているような印象を受ける。トレンチ東端から西に7m付近から傾斜していく。溝の延長は検出できなかったが、地形は東に湾曲するように傾斜していくことから、溝も地形に

沿って南の谷に流れていくようである。

4) トレンチ6

トレンチ5と同様に溝(周溝)の延長と墳裾の確認のために2号墳の北西に長さ4m、幅1mのトレンチを設定した。表土①から④層まではトレンチ4の溝と同じ堆積状況であった。明確な東側の落ち込み、西側の立ち上がりは確認できていないが、溝の続きであると推測され、溝は浅くなるが東側に婉曲して北側の谷地形に続くとも推測される。さて、⑤層については多くの炭と焼土が検出された。炭は特に⑤層の上層に多くみられた。地山面は樹木の根により攪乱を受けていたが、生産関連の遺構の可能性も考えられたため、トレンチ西に十字トレンチを設定し、一部掘り下げた。褐灰色の④層からは土師器甕口縁部や壺底部など出土しているが細片のため、時期は不明である。⑤層からは土師器細片19点、板石(被熱)や粘土塊15点(厚いもので4cm以上)、小礫なども出土している。⑥⑦層は地山質に近い土質である。調査終了間近で溝の確認を目的としていたため、詳細な調査は実施できなかった。

5) 墳丘の築造方法

トレンチ4の状況から旧表土(④層)より上層を盛土で築造している可能性が高いことが分かった。その場合、旧表土上面標高22.4mから墳頂の27.4mまで約5mを盛土造成したことになり、かなり大規模な土木工事が予想される。西側のトレンチ1箇所のみで、西南北及び墳丘中央部の築造状況が把握できていないため、あくまでも推定であるが、少なくとも墳丘西側は地山成形と盛土での築造が採用されている。墳丘の盛土は、丘陵尾根を造成した際の廃土及び溝(周溝)を掘削した際の廃土を利用していたと思われ、その具体的な工法については不明である。

6) 墳丘の復元

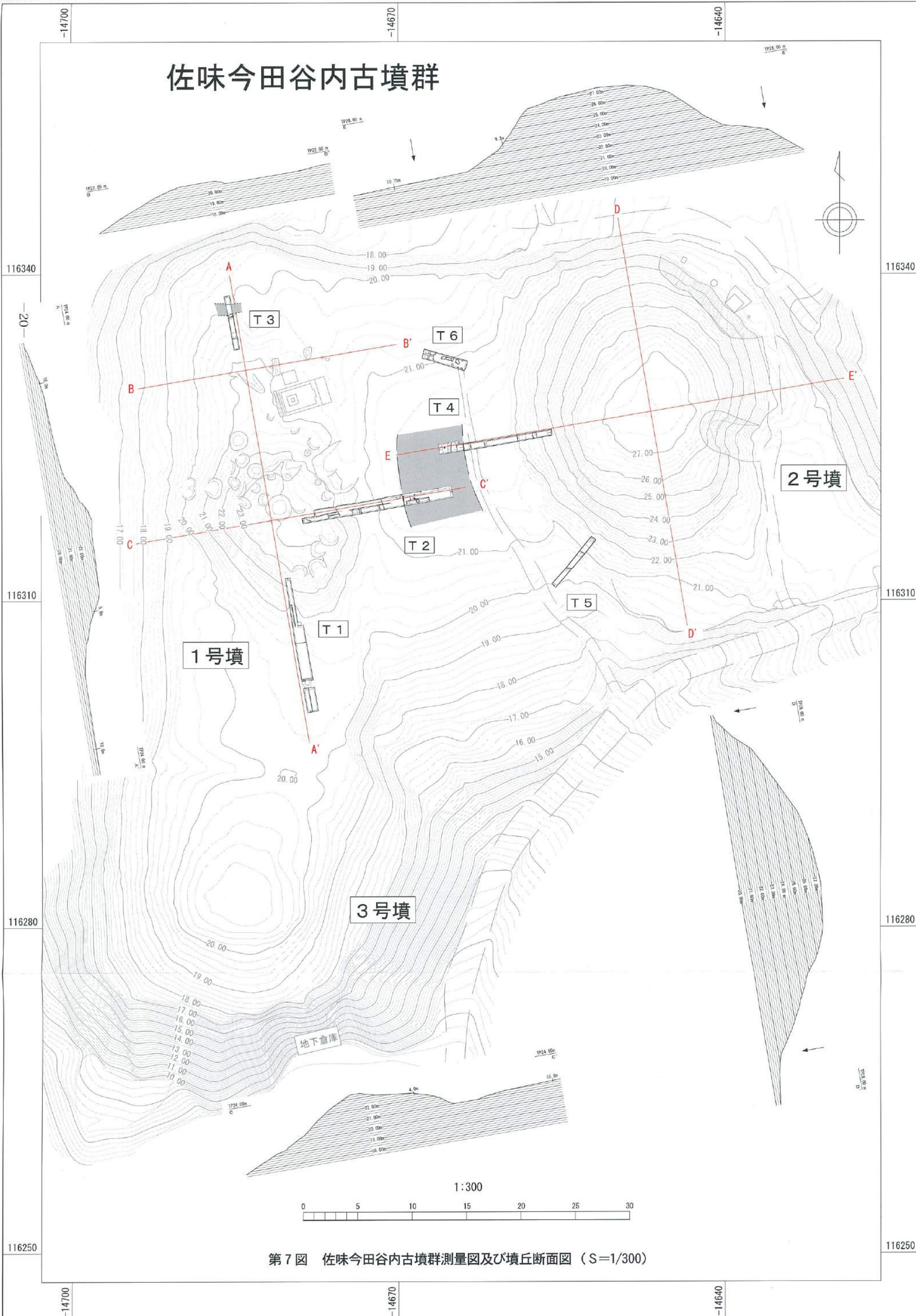
2号墳についても、地形を巧みに利用して墳丘を造成していることが分かる。西側では標高20m、南・東側では21mラインで平坦なテラスを形成し、墳形に合わせて地山成形していると思われる。北側は比高差2mの段がある。後世に手が加わった可能性もあるが、およそ築造時の痕跡を留めているのではないかと思われる。その場合、北東からの視点も意識していることが考えられる。(北・西・南は可視)墳丘に沿って東側に平坦面は続くが、谷地形に接する地点での墳裾が想定される。

南東側は後世に大きく削平され、南北に行き来する道を後世に普請されているため遺存状況が悪い。墳丘の流出土等により、判別しにくい地点もあるが、南東にはテラス状の平坦面の存在が確認できる。

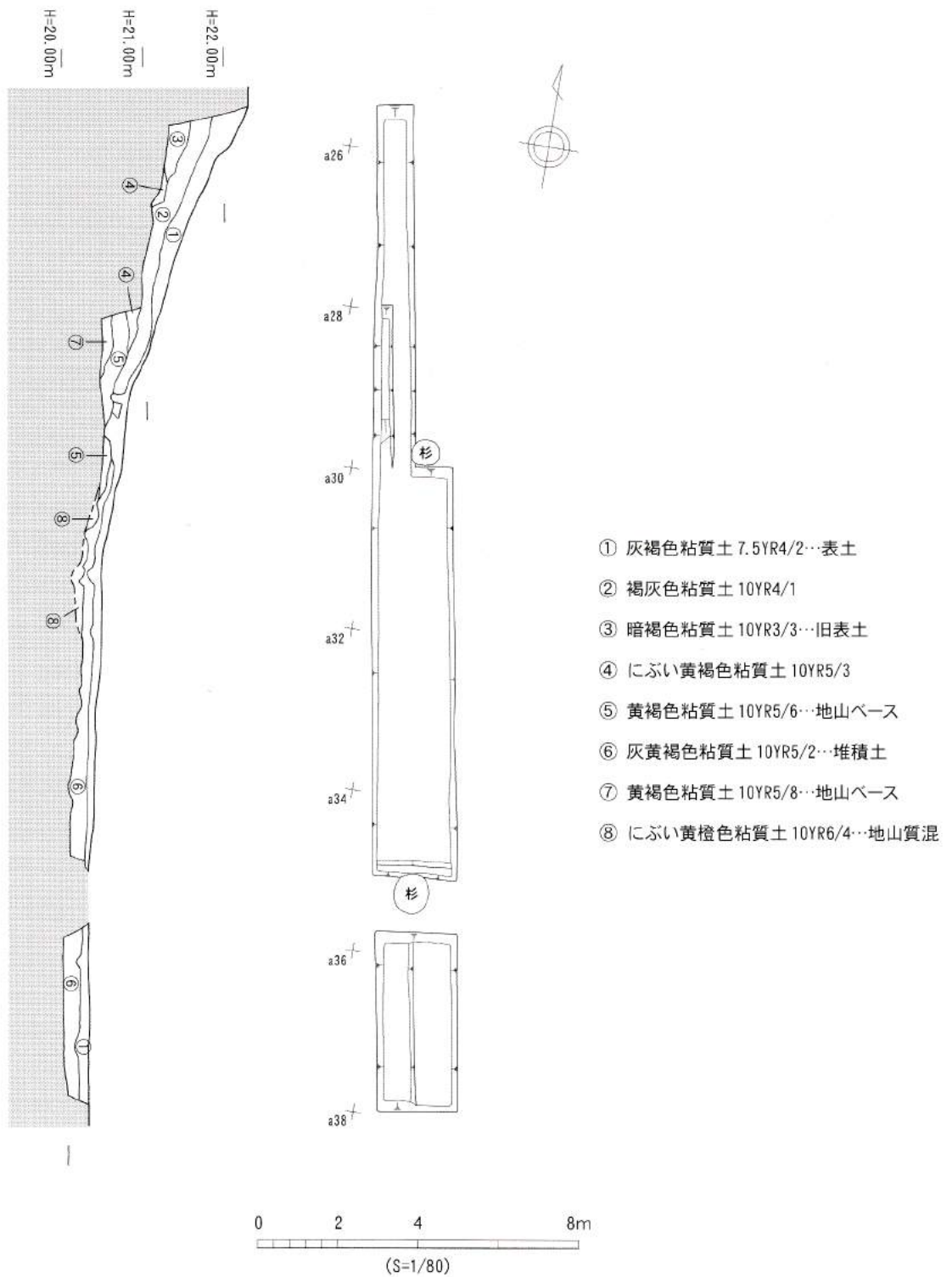
周溝

西側については、1号墳との間に存在する溝が1号墳に付属する周溝ではなく、出土遺物や古墳の築造過程、トレンチ調査成果を考慮すると2号墳の周溝である可能性が高い。トレンチ5の西側の落ち込みとトレンチ4の周溝の肩辺り、トレンチ6の東に1m辺りに周溝が巡り、円形の墳裾が復元できる。北・東・南は自然地形により墳丘は明瞭に区別されるが、西側は丘陵が続くため、明確に区切る区画溝としての周溝が造られたと思われる。上端幅(推定)7.6m、下端幅(推定)4.2m、深さ0.8mの周溝が復元できる。

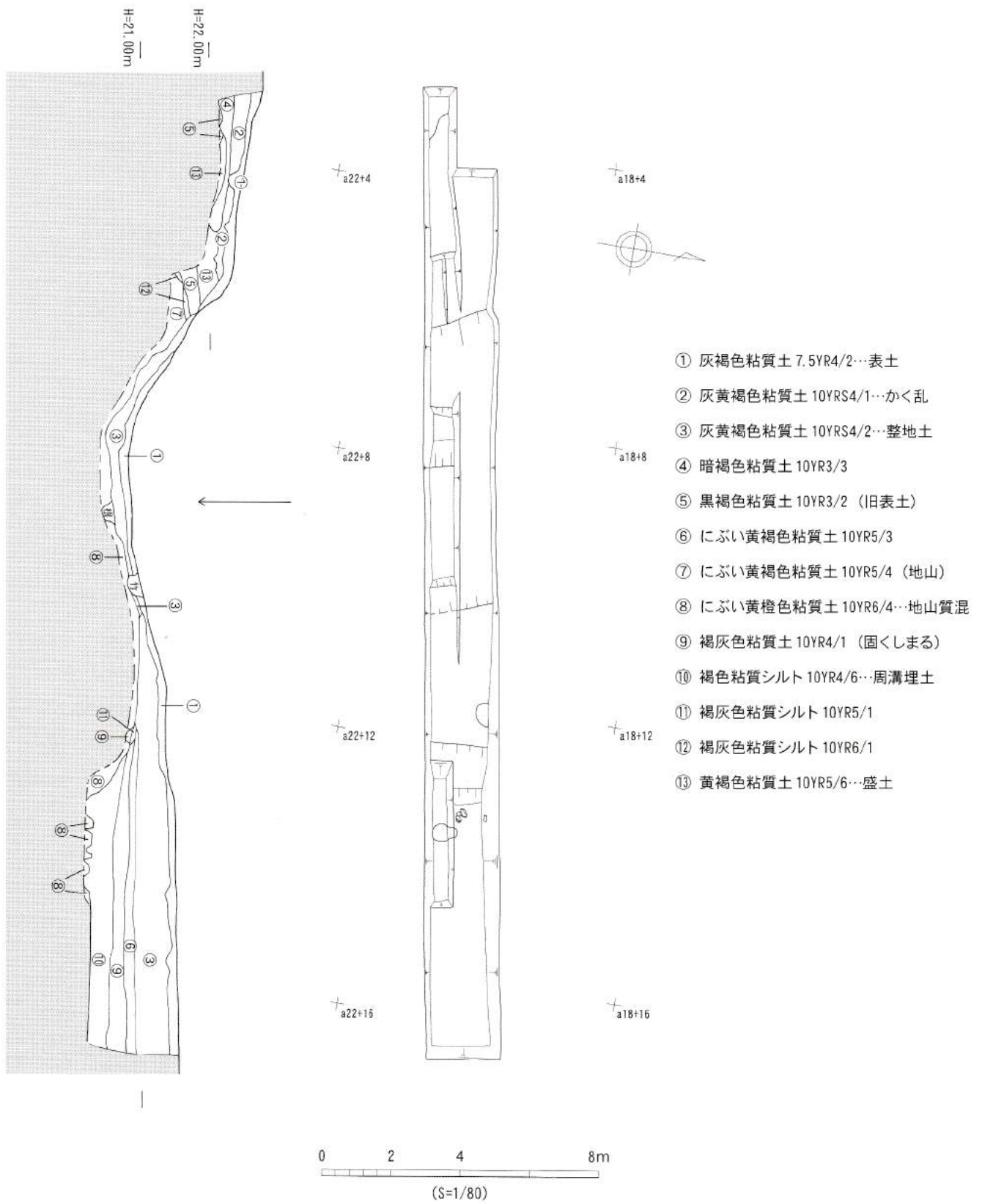
佐味今田谷内古墳群



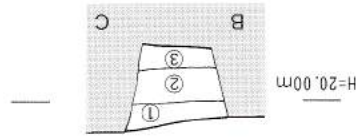
第7図 佐味今田谷内古墳群測量図及び墳丘断面図 (S=1/300)



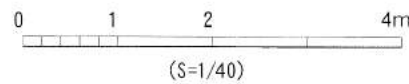
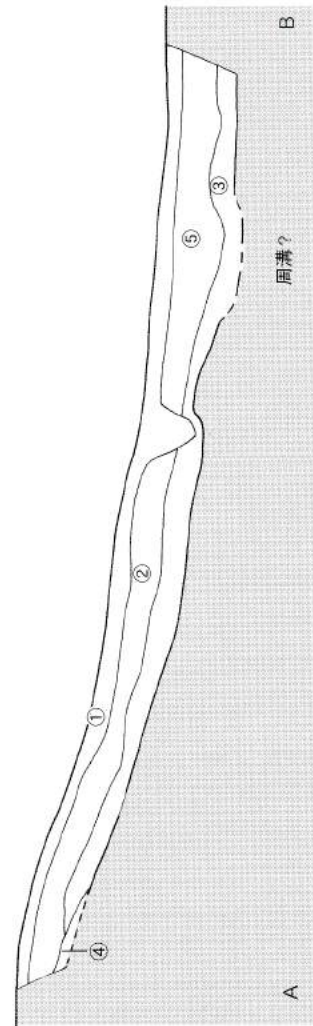
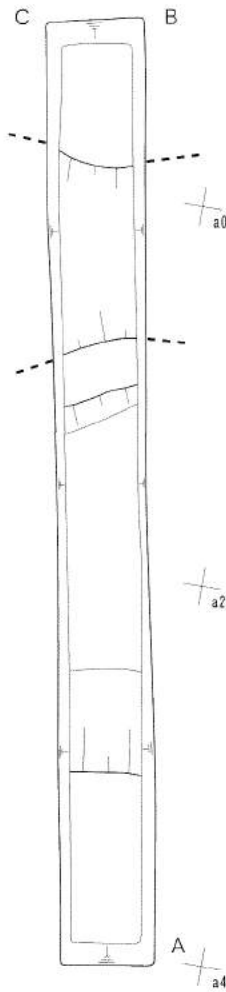
第8図 トレンチ1平面図・土層実測図 (S=1/80)



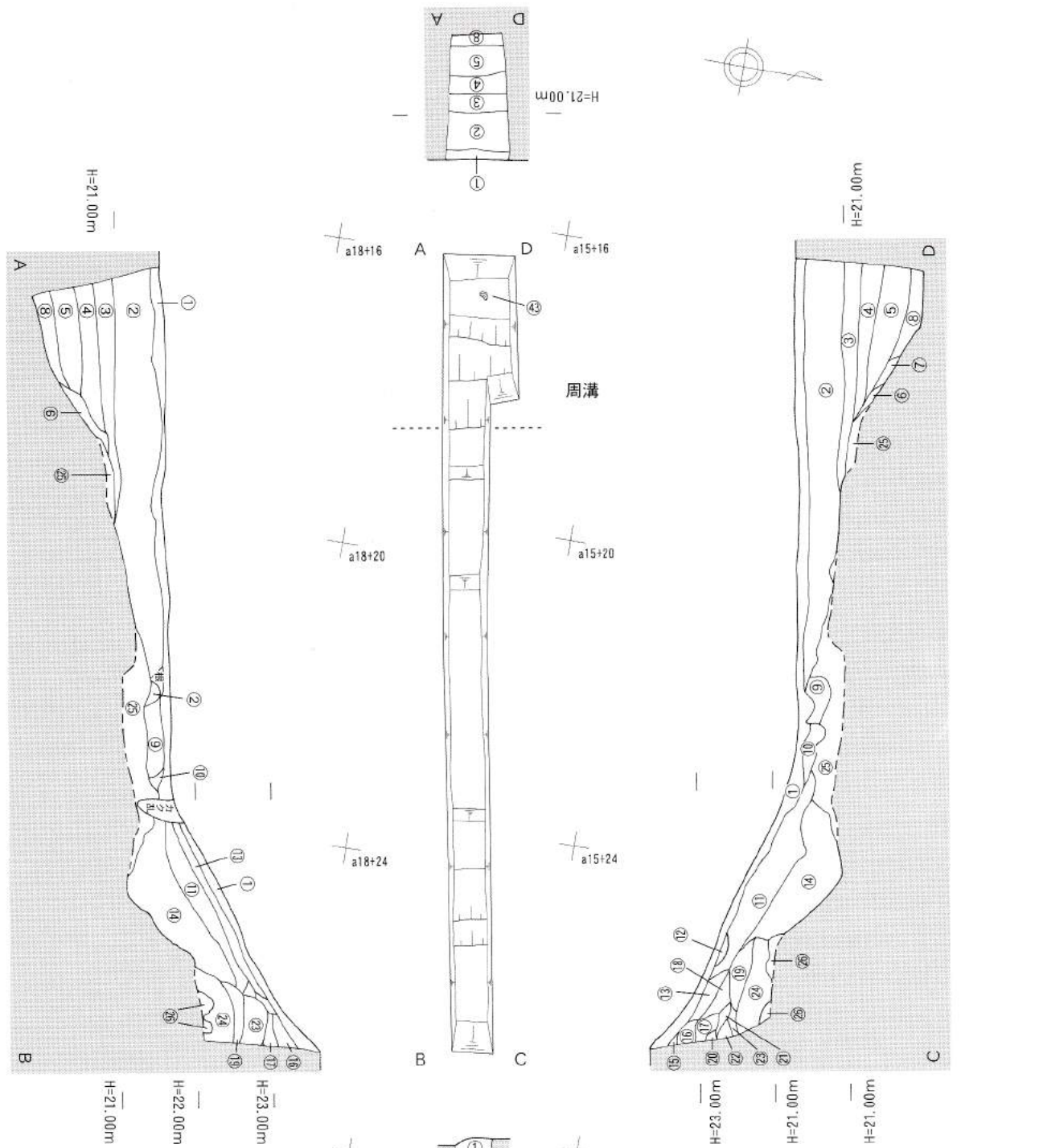
第9図 トレンチ2平面図・土層実測図 (S=1/80)



- ① 灰褐色粘質土 7.5YR4/2…表土
- ② にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
- ③ にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3
- ④ 褐色粘質土 10YR4/4…地山ベース
- ⑤ 灰黄褐色粘質土 10YR4/2

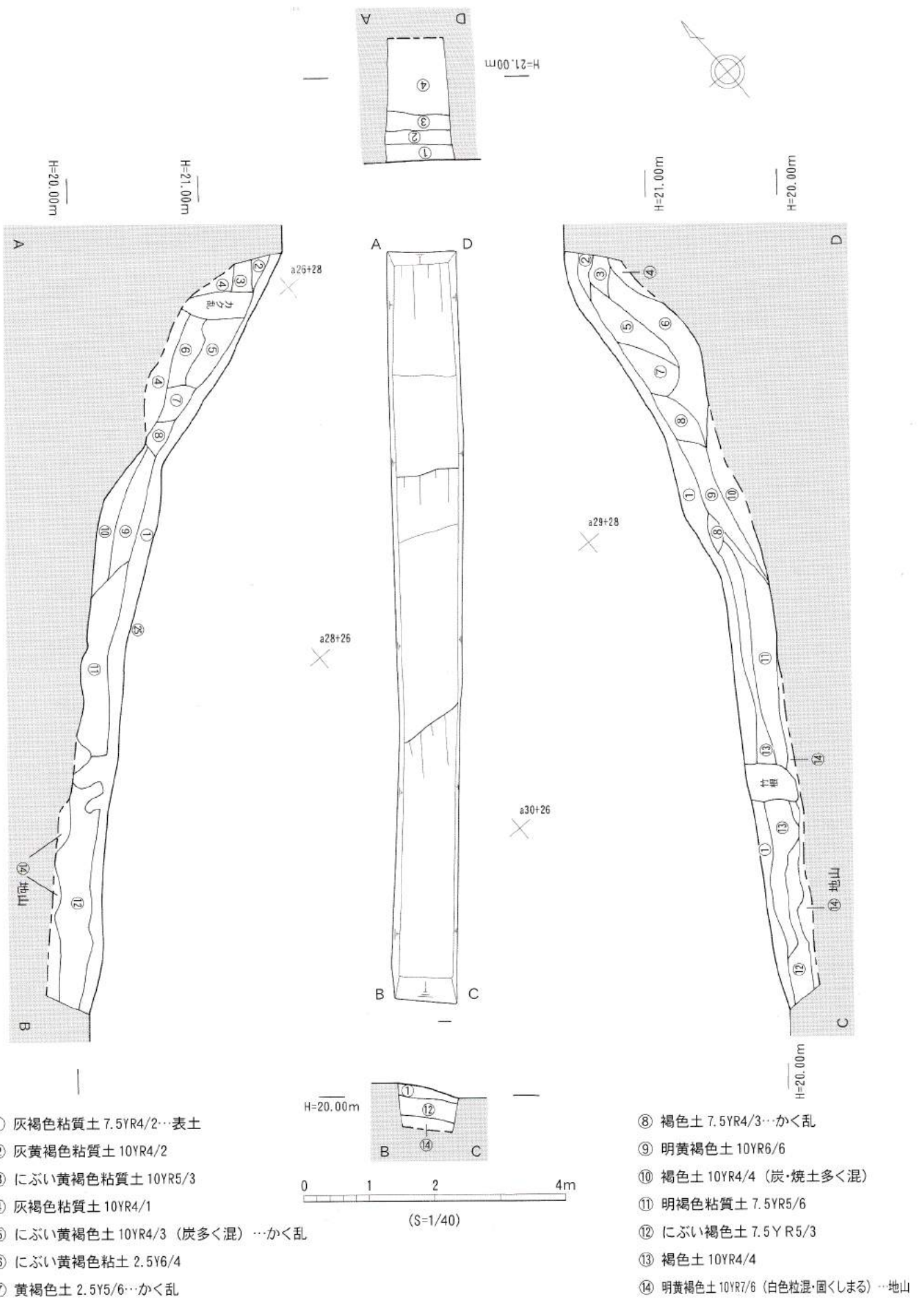


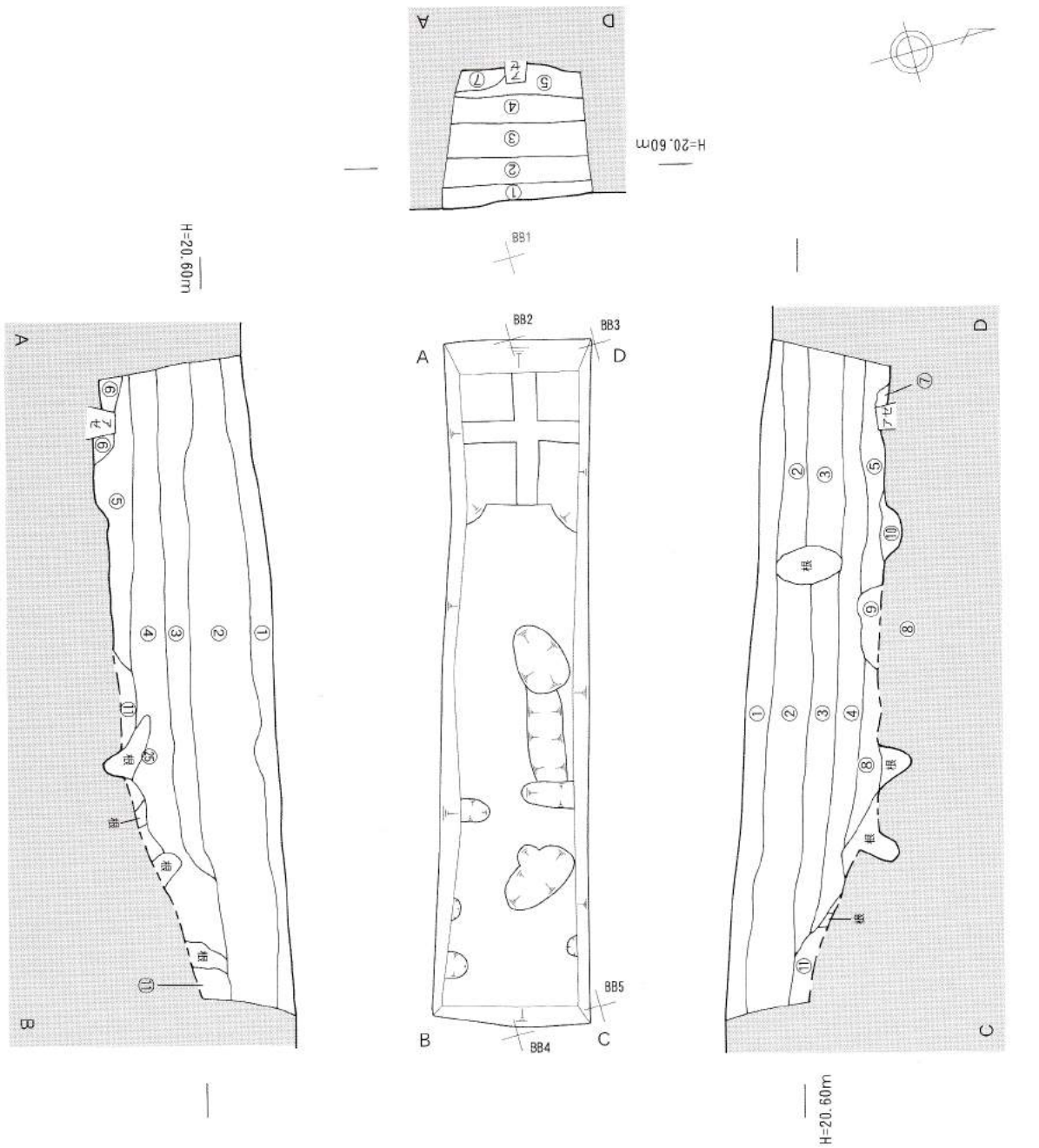
第10図 トレンチ3平面図・土層実測図 (S=1/40)



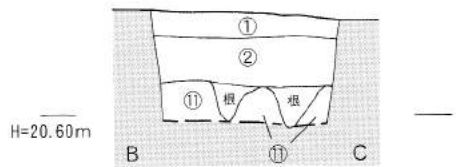
- ① 灰褐色粘質土 7.5YR4/2…表土
- ② 灰黄褐色粘質土 10YR4/2…整地土
- ③ にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
- ④ 灰褐色粘質土 10YR4/1 (硬くしまる)
- ⑤ にぶい黄褐色粘土 10YR4/3
- ⑥ にぶい黄褐色粘土 10YR4/3 (地山質混)
- ⑦ にぶい黄褐色粘土 10YR4/3
- ⑧ にぶい黄褐色粘土 10YR4/3 (明黄褐色土混) …周溝埋土
- ⑨ 黄褐色土 10YR5/6…かく乱
- ⑩ にぶい黄褐色土 10YR5/3…かく乱
- ⑪ 明黄褐色土 2.5Y7/6
- ⑫ 明黄褐色土 2.5Y7/6 (黒褐色土混合)
- ⑬ 明黄褐色土 2.5Y7/6 (表土混)
- ⑭ 褐色土 7.5YR4/4…かく乱
- ⑮ 黄褐色土 10YR5/4 (竹根)
- ⑯ 黄褐色土 10YR5/6 (竹根)
- ⑰ 明黄褐色土 2.5Y6/6 (淡黄色粘土ブロック混・竹根)
- ⑱ 明黄褐色土 2.5Y6/6 (黄色粘土ブロック混・竹根)
- ⑲ にぶい黄褐色土 10YR6/4 (竹根)
- ⑳ 黄褐色土 2.5Y/3 (淡黄色粘土ブロック混)
- ㉑ 黄褐色土 2.5Y/3 (黄色粘土ブロック混)
- ㉒ オリーブ褐色土 2.5Y5/4
- ㉓ 黄褐色土 2.5Y5/4 (淡黄色粘土ブロック多く混)
- ㉔ 黒褐色粘質土 10YR3/2 (旧表土)
- ㉕ 明褐色粘質土 7.5YR5/6…地山
- ㉖ 明黄褐色粘質土 10YR7/6 (白色粒混) …地山質

第 11 図 トレンチ 4 平面図・土層実測図 (S=1/80)





- ① 灰褐色粘質土 7.5YR4/2…表土
- ② 明黄褐色土 10YR7/6
- ③ 明黄褐色土 10YR6/6
- ④ 明赤褐色土 10YR5/8
- ⑤ にぶい黄橙色土 10YR6/4
- ⑥ にぶい黄橙色土 10YR6/3
- ⑦ にぶい黄褐色土 10YR5/3



- ⑧ 暗褐色土 10YR3/3
- ⑨ にぶい黄褐色土 10YR5/4
- ⑩ 黄褐色土 10YR5/6…地山質
- ⑪ 黄褐色土 10YR4/4
- ⑫ にぶい褐色土 7.5YR5/3
- ⑬ 褐色土 10YR4/4
- ⑭ 明黄褐色土 10YR7/6
(白色粒混・固くしまる)…地山

第13図 トレンチ6平面図・土層実測図 (S=1/40)

第4章 自然科学分析

1号墳出土鉄製品X線透過撮影

第1節 X線透過撮影

はじめに

1号墳墳頂トレンチ2の②層から鉄刀の茎(48)、④層から長頸鏃(49)の2点の鉄製品が出土した。肉眼で遺物の特定はできたが、X線透過撮影によって内部の状態を確認し、より詳細な観察に努めた。

1. 試料

①残存長3.5cm、幅2.2cmの鉄刀の茎で目釘孔が残る。柄と推測される木質が遺存していた。②長頸鏃の先端部が4点錆着したもので残存長3.4cmを測る。市教委でクリーニングを実施し、実測段階で林大智氏(石川県埋文センター)が再度クリーニングを行った。

2. 撮影方法

金沢学院大学中村晋也准教授に依頼し、保存科学研究室の学生の協力のもと実施した。撮影条件は、①は電圧80kV、②は70kVとし、いずれも電流は2mA、照射時間は2分とした。

3. 結果

①X線透過撮影の結果、背側に幅2mm、厚さ1.5mm程の微細な紐を巻きつけた痕跡が発見された。飾り太刀等の柄間に巻きつけられる銀糸の可能性も考えられたため、蛍光X線定性分析を追加実施した。

蛍光X線分析の結果、鉄(Fe)以外に銀(Ag)等の金属元素の検出は認められなかった。よって、有機質の紐(植物繊維等)が巻きつけられ、直接茎と触れていた部分のみが錆化して残存したものと解釈した。

②X線透過撮影によって個体数の解明を試みたが、鉄鏃を画像化することは困難であった。(未掲載)

①では、当初見落としていた紐の痕跡をX線写真で突き止めることが大きな成果であった。今後も出土した鉄製品の詳細な観察と科学分析を併用した調査を実施していきたい。



写真3 鉄刀茎①



写真4 鉄刀茎②



写真5 X線透過画像

第2節 蛍光X線定性分析

1号墳出土ガラス玉蛍光X線定性分析

はじめに

1号墳墳頂トレンチ2の鉄刀の茎(48)が出土したのと同じ②層目より、ガラス小玉(50)が出土した。ガラスの基礎ガラス材質や着色剤、製作技法の推定を目的に、蛍光X線定性分析、顕微鏡観察を依頼した。

1. 試料

胴側面最大長7.5mm、小口最大径5.49mm、孔径2.22mm、重量0.3678gを測る青色のガラス玉1点。

2. 分析方法

金沢学院大学中村晋也准教授に依頼し、保存科学研究室の学生の協力のもと実施した。

蛍光X線分析には測定装置SEA5230(管球ターゲットはMo)を用い、分析箇所をクリーニングの後、コリメータ1.8mmで2箇所を分析した。分析条件は励起電圧15kV、45kVの2条件、試料室内の雰囲気は真空とした。

3. 結果

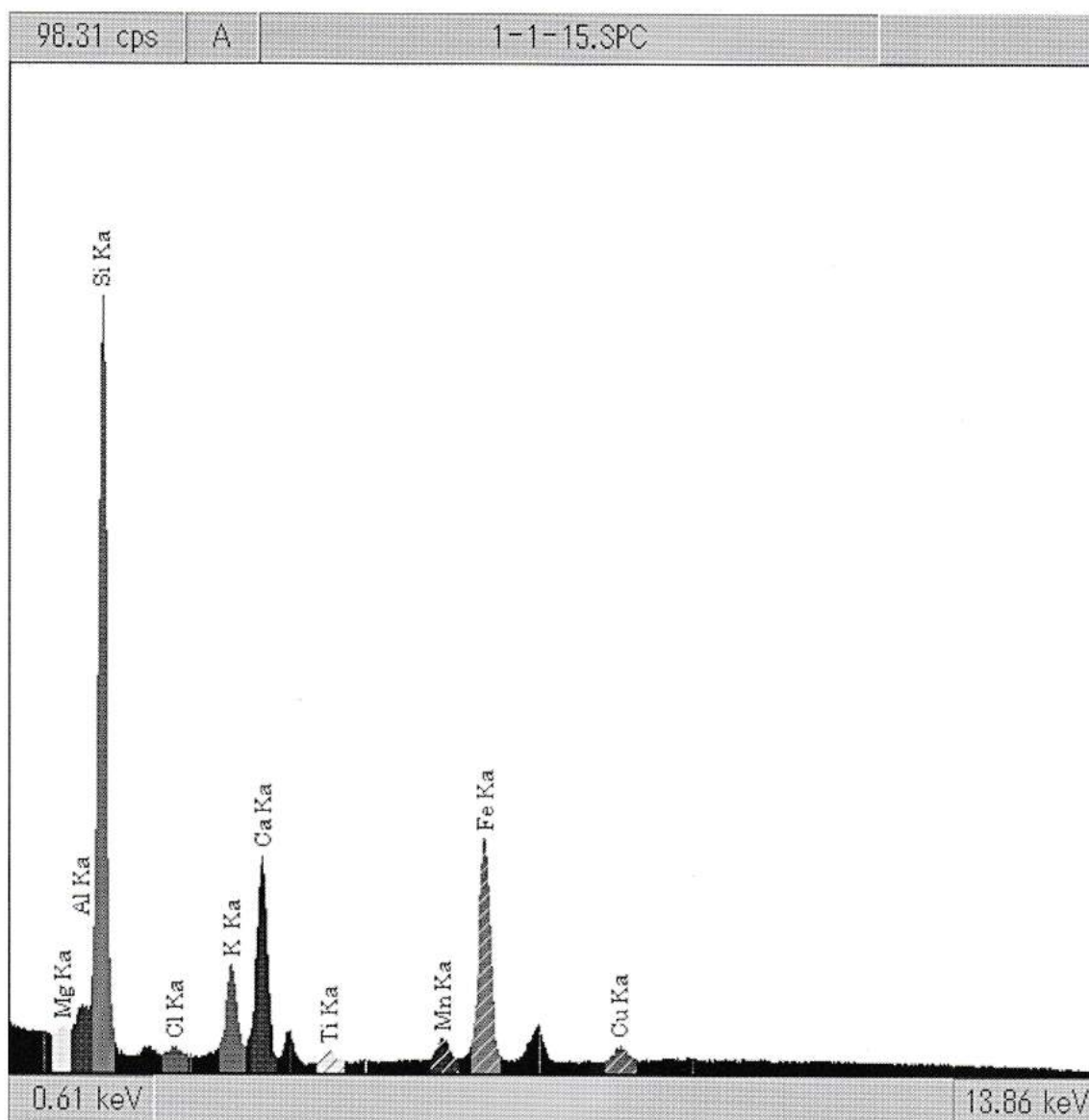
検出された元素から(スペクトル図参照)、基礎ガラス材質は「ソーダ石灰ガラス」でCo(コバルト)によるイオン着色であると推定された。また、実体顕微鏡観察で胴側面に筋状の痕跡を確認した(写真9)。さらに生物顕微鏡で透過光のもと観察した結果、孔と平行方向に走る気泡列や同方向を長軸とする楕円形の気泡を確認した(写真12, 13, 14)。これらはいずれも、溶かしたガラス塊を管状に引き伸ばして成形する際に見られる特徴であり、本試料は「引き伸ばし管切技法」による製作と推定できる。ガラス玉の制作技法については、竹森杏奈氏(金沢学院大学大学院修士2年)にご教示を得た。

※ガラス玉の写真は、すべて金沢学院大学歴史学専攻保存科学研究室が撮影した。



写真6 蛍光X線分析風景

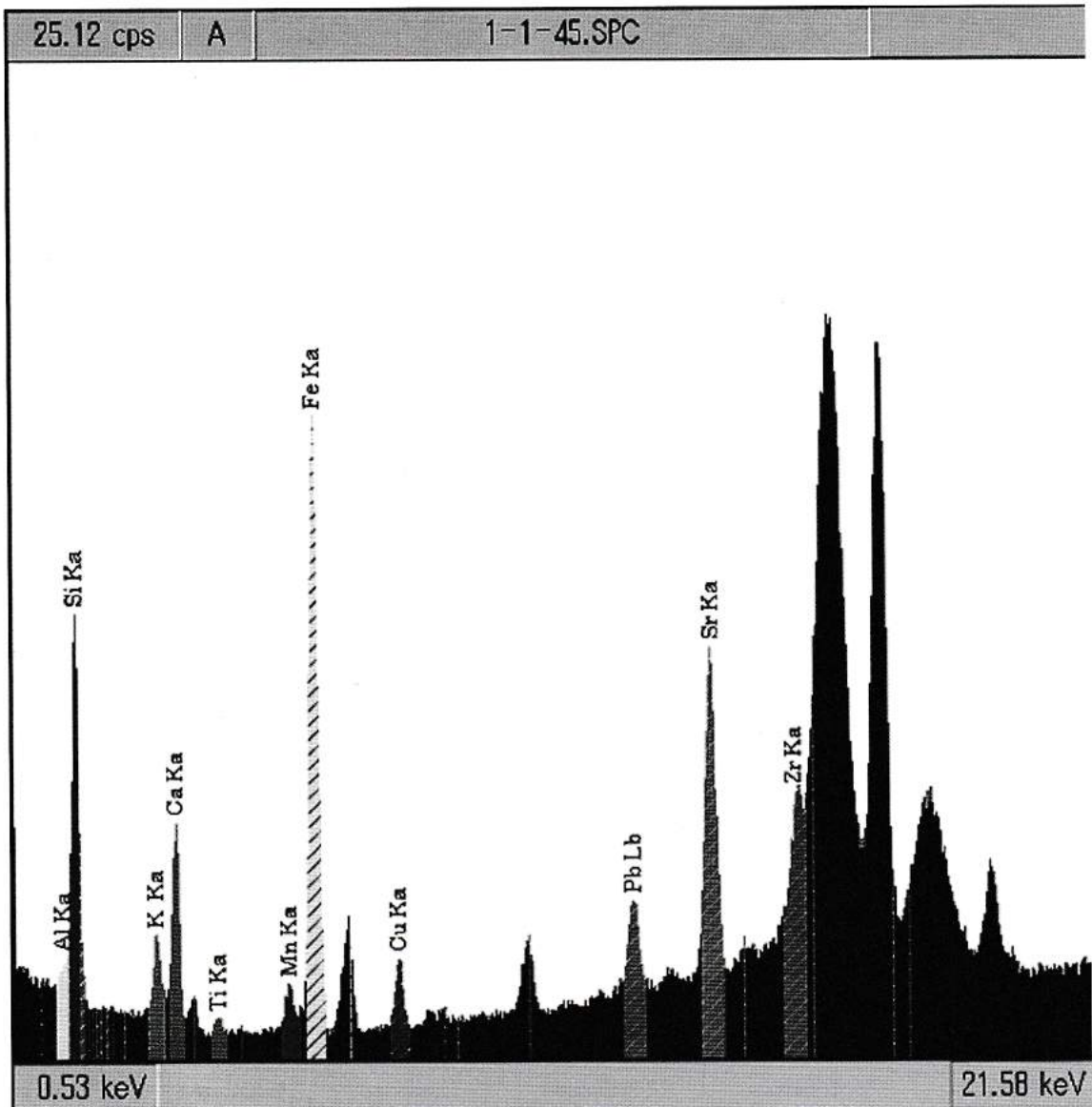
第 14 図 【スペクトル図】 (15kV)



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
12	Mg	マグネシウム	K α	51.905	1.13- 1.38
13	Al	アルミニウム	K α	72.141	1.36- 1.61
14	Si	ケイ素	K α	483.736	1.61- 1.87
17	Cl	塩素	K α	28.864	2.48- 2.76
19	K	カリウム	K α	90.296	3.17- 3.46
20	Ca	カルシウム	K α	167.227	3.54- 3.84
22	Ti	チタン	K α	24.423	4.35- 4.66
25	Mn	マンガン	K α	39.174	5.73- 6.06
26	Fe	鉄	K α	202.579	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	34.598	7.86- 8.22

第 15 図 [スペクトル図] (45kV)



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	28.182	1.36-1.61
14	Si	ケイ素	K α	91.036	1.61-1.87
19	K	カリウム	K α	33.536	3.17-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	56.486	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	13.634	4.35-4.66
25	Mn	マンガン	K α	23.837	5.73-6.06
26	Fe	鉄	K α	154.029	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	30.741	7.86-8.22
38	Sr	ストロンチウム	K α	147.649	13.92-14.36
40	Zr	ジルコニウム	Z r	121.135	15.52-15.97
82	Pb	鉛	P b	63.002	12.42-12.84



写真7 ガラス玉 (実寸)

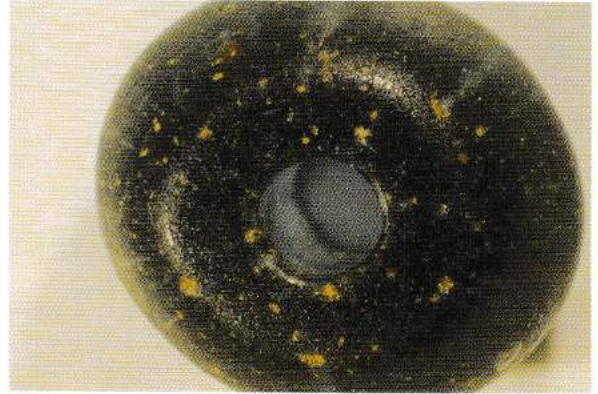


写真8 小口面 (10倍)



写真9 胴側面 (10倍)

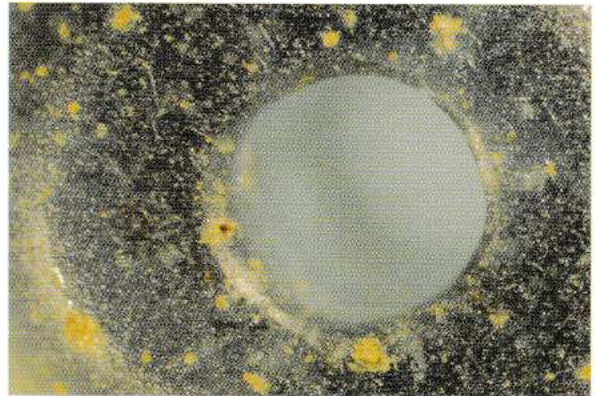


写真10 小口研磨面 (20倍)

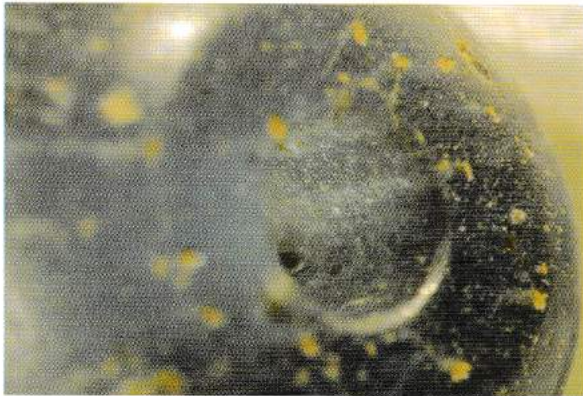


写真11 孔内壁 (20倍)



写真12 引き伸ばされた楕円気泡 (100倍)



写真13 気泡列① (40倍)

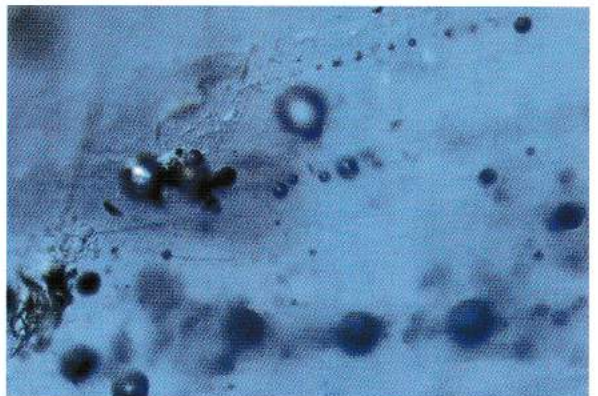


写真14 気泡列② (100倍)

表2 佐味今田谷内古墳群遺物観察表

遺物番号	遺構土層	注記	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		残存量	備考
					口径	器高	底径	外面	内面			外面	内面		
1	1号墳前部西 T3 ②層	1号墳 T3 前部北端表土直下 橙色土 141023	須恵器	壺?		(3.5)		ロクロナデ	ロクロナデ	砂-(中・小)少	良	N5/0 灰色	N5/0 灰色	口縁部 1/12 以下	
2	1号墳前部西 T3 ②層	1号墳 T3 前部北端表土直下 橙色土 141023	須恵器	台付長頸壺?高坏?(口縁部)	13.8	(2.3)		ロクロナデ	ロクロナデ	砂-(小)少	並	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	口縁部 1/12	17と同一か
3	1号墳前部西	No.61 141119	須恵器	台付長頸壺?高坏?(口縁部)	16.0	(2.2)		ロクロナデ	ロクロナデ	砂-(小)少	並	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	口縁部 1/12	2と同一
4	1号墳前部西	No.61 141119	須恵器	裝飾器台?(脚部)	(2.3)	(3.4)	(1.6)	波状文	ロクロナデ	砂-(小)少	並	N5/0 灰色	N6/0 灰色	不明	外面波状文 透孔あり
5	1号墳前部北端	北端(ケヤキ) No.40	須恵器	器台 or 高坏(口縁?)		(4.6)		タタキ(カキ目 平行線文)	ナデ 指頭圧痕	密 微レキ(2~1.5mm) 海綿骨針	並	10 YR 5/1 褐灰色	10 YR 5/2 灰黄褐色	小片	端部が透孔の 可能性あり
6	1号墳前部西	前部西 くびれ部西 No.16	須恵器	壺?		(4.8)		タタキ(平行線文)	ナデ	密 中粒砂微(0.5~0.3mm)	並	5 Y 4/1 灰色	7.5 Y 4/1	小片	断面:茶褐色
7	1号墳前部西	No.61 141119	須恵器	裝飾器台 or 高坏		(5.2)		ロクロナデ	ロクロナデ	砂-(小)少 小レキ(0.5~5mm)少	並	N5/0 灰色	N5/0 灰色	口縁部 1/12	外面波状文
8	1号墳くびれ部西	No.17 141119	須恵器	裝飾器台 or 高坏	(4.0)	(1.9)	(2.2)	ロクロナデ	ナデ 当て具痕	砂-(小)少 石英-(小)少	並	N5/0 灰色	N6/0 灰色	基部	外面波状文、 烈点文基部(脚部と環部の 接合部)に接合痕有 19と同一
9	1号墳前部西	前部西 くびれ部西 No.17	須恵器	壺 肩部		(3.7)		ロクロナデ	ロクロナデ	密 極粗粒砂少(1.5~1mm) 細粒砂少(0.3~0.125mm) 海綿骨針	並	10 YR 5/1 褐灰色	7.5 YR 5/2 灰褐色	肩部	波状文 自然釉
10	1号墳前部西	前部西 くびれ部西 No.17	須恵器	壺?		(6.3)		タタキ(平行線文)	タタキ-ナデ(同心円文)	密 細粒砂少(0.3~0.125mm) 海綿骨針	良	N 5/0 灰色	N 4/0 灰色	小片	断面:茶褐色
11	1号墳前部西	前部西 くびれ部西 No.17	須恵器	壺?		(4.4)		タタキ(カキ目 平行線文)	タタキ-ナデ(同心円文)	密 細粒砂微(0.3~0.125mm) 海綿骨針	良	5 Y 5/1 灰色	2.5 Y 6/2 灰黄色	小片	
12	1号墳前部西	前部西 くびれ部西 No.17	須恵器	壺?		(3.3)		タタキ(平行線文)	ナデ	密 細粒砂少(0.3~0.125mm) 海綿骨針	並	2.5 Y 5/1 黄灰色	10 YR 6/2 灰黄褐色	小片	
13	1号墳くびれ部西	No.22 141119	土師器	壺(口縁部)	14.4	(2.4)		ナデ	ナデ	砂-(小)少 微砂粗-多 石英(0.5mm~5mm 大)-少、海綿骨針	並	5 YR 6/6 褐色	5 YR 6/6 褐色	口縁部 1/12	
14	1号墳前部西くびれ部西	前部西 くびれ部西 No.15	須恵器	高坏 or 壺		(3.3)		ロクロナデ	ロクロナデ	密 中粒砂微(0.5~0.3mm) 細粒砂少(0.3~0.125mm) 海綿骨針	並	5 Y 6/1 灰色	5 Y 6/1 灰色	小片	波状文 突帯
15	1号墳くびれ部西	No.22 141119	須恵器	壺 or 臺?	(3.8)	(5.0)	(0.6)	カキ目 タタキ目(平行線文)	当て具痕(同心円文) -ナデ	礫-(小)1コ 砂-(小)少	良	5 Y 5/1 灰色	5 Y 6/1 灰色	胴部一部	
16	1号墳南端西	前部南端(西) No.22	土師器	壺		(2.6)	6.4	ナデ	ハケ	粗 礫微(3~2mm) 極粗粒砂少(1.5~1mm) 海綿骨針	並	10 YR 5/1 褐灰色	2.5 YR 6/6 褐色	底部	
17	1号墳後部北	くびれ No.21 141129	土師器	壺 or 鉢?	5.0	5.0	0.8	ナデ?	ハケ後丁寧に ナデ消す	礫-(小)少 砂-(小)少 石英微 海綿骨針微	並	10 YR 8/3 浅黄褐色	10 YR 8/3 浅黄褐色	胴部一部	刻線1条 一部黒斑
18	1号墳後部北端	後部北端 No.23	土師器	壺		(3.6)		ハケ、ナデ	ケズリ、 指頭圧痕	密 赤色粒子少 中礫微(6.3~4mm) 微礫少(2~1.5mm) 中粒砂少(0.5~0.3mm) 海綿骨針	良	10 YR 7/3 にふい黄褐色	10 YR 6/6 明黄褐色	底部	
19	1号墳後部北	くびれ北 No.21 141119	須恵器	壺	9.0	7.4	0.8	タタキ目(平行線文)	当て具痕(同心円文)	砂-(小)少	良	N5/0 灰色	N5/0 灰色	胴部一部	
20	1号墳後部西	No.55 141119	土師器 or 弥生?(赤彩)	高坏?(口縁部)	(20.0)	(3.0)		レミミガキ(赤彩)	ガキ(赤彩)	礫-(小)1コ 砂-(小)少 赤色粒少 海綿骨針少 石英少	良	5 YR 4/6 赤褐色	5 YR 5/4 にふい赤褐色	口縁部 1/12 以下	
21	1号墳後部西	No.57 141119	土師器	壺(底部)		(2.5)	6.8	ナデ 摩耗	ナデ 指圧痕	砂-(小)少 海綿骨針 微	並	10 YR 7/4 にふい黄褐色	10 YR 7/3 にふい黄褐色	底部 1/12	平底
22	1号墳前部西	No.61 141119	須恵器	坏蓋		(1.3)		天井部ケズリロクロナデ	ロクロナデ	砂-(小)少	並	N4/0 灰色	N5/0 灰色	天井部一部	器厚 2.5~5mm
23	1号墳後部西	後部西斜面 No.4	須恵器	壺		(3.7)		タタキ(カキ目 平行線文)	タタキ(同心円文)	密 細粒少(3~2mm) 海綿骨針	良	10 YR 5/2 灰黄褐色	10 YR 3/1 黒褐色	小片	外面黒褐色
23	1号墳後部南西	後部南西 墳頂近く No.1	土師器	高坏		(3.6)	12.0	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	密 細礫微(3~2mm) 海綿骨針	並	10 YR 8/3 浅黄褐色	10 YR 8/3 浅黄褐色	1/12 脚部	一部磨耗

遺物番号	遺構土層	注記	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土	焼成	色調		残存量	備考
					口径	器高	底径	外面	内面			外面	内面		
24	1号墳南裾	1号墳南 T1 a36 坑の東 3m 地点 141127 No.76	須恵器	壺 (胴部)?	(7.0)	(3.0)	(1.4)	タタキ目 (平行線文?)	タタキ目 (平行線文?)	砂-(小)少	良	N5/0 灰色	N5/0 灰色	胴部一部	当て具は同心円文でなく平行線文
25	1号墳後円部墳頂	後円部墳頂(大杉) No.9	土師器	壺		(5.7)		ハケ	ハケ	粗細砂少(3~2mm) 中粒砂少(0.5~0.3mm) 海綿骨針	並	10YR 6/3 にぶい黄褐色	5YR 5/6 明赤褐色	小片	厚さ1.2cm ざらざらした胎土
26	1号墳後円部(北)	後円部墳頂(北) No.11	須恵器	壺		(4.8)		タタキ (平行線文)	タタキ-ナデ (同心円文)	密細砂微(3~2mm) 細粒砂微(0.3~0.125mm) 海綿骨針	良	7.5Y 6/1 灰色	N 4/0 灰色	小片	
27	1号墳 T1	後円部トレンチ1 141119	土師器	高坏		(3.5)		摩耗	調整不明 摩耗	礫-(小)多 石英・砂-(中・小)少 海綿骨針含む	並	7.5YR 6/4 にぶい黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄褐色	頭部 6/12	頭径 3.6 cm 外面・赤彩の痕跡らしきものあり
28	1号墳後円部西	後円部(西側) No.52 141119	土師器	壺 (口縁部)	14.8	(2.3)		ナデ	ナデ	砂-(小)少 石英母、石英、微海綿骨針	不良	10YR 6/4 にぶい黄褐色	10YR 6/4 にぶい黄褐色	有段口縁部 1/12	焼成不良
29	1号墳後円部南	No.43 141119	土師器	壺 (底部?)		(2.9)		ハケ-板ナデ	ハケ-ナデ	砂-(大・小)少 石英微 海綿骨針 微	良	5YR 6/6 褐色	10YR 7/4 にぶい黄褐色	底部くびれ部 4/12	
30	1号墳後円部墳頂南	No.42 141119	土師器	壺? (底部)		(3.5)	(12.0)	ナデ? 接合痕	ハケ、摩耗	砂-(小)少 ザラつき感がある	並	10YR 7/4 にぶい黄褐色	10YR 7/4 にぶい黄褐色	底部 1/12	製埴土器のような質感
31	1号墳後円部南東	後円部南東 No.27	板石	安山岩	(9.6)	(11.2)	(2.3)			重量: 243 g		5Y 6/2 オリーブ灰色	5Y 6/2 オリーブ灰色	小片	埋葬施設に石材?
32	1号墳後円部南東	後円部南東 No.27	板石	安山岩	(14.0)	(7.4)	(2.8)			重量: 226 g		5Y 6/2 オリーブ灰色	5Y 6/2 オリーブ灰色	小片	埋葬施設に石材?
33	2号墳頂	墳頂 表探	土師器?	壺		(3.0)		ヨコナデ	摩耗	極粗粒砂(2~1mm)少 粗粒砂(1~0.5mm)多	良	7.5 YR 5/3 にぶい褐色	7.5 YR 6/3 にぶい褐色	有段口縁 1/12 以下	
34	2号墳南東中腹	No.69	土師器	高杯基部			台部径 3.3	ナデ?	ナデ	粗粒砂(1~0.5mm)少 中粒砂(0.5~0.3mm)少 赤色粒(0.5~0.3mm)少	良	7.5 YR 7/4 にぶい褐色	7.5 YR 6/4 にぶい褐色	小片	
35	2号墳南東	2号墳 No.69 141119	土師器	底部穿孔土器		(2.4)	2.6	ハケ 底部ナデ?	ハケ、指圧痕	礫-(小)やや多 砂-(小)少、石英(1~4mm)多 海綿骨針	並	10YR 6/4 にぶい黄褐色	10YR 6/3 にぶい黄褐色	底部 12/12	孔径 1.0 cm 焼成前に外から穿孔
36	2号墳墳頂東	No.67 141119	須恵器	壺 (底部近く)		(4.3)		タタキ目 (平行線文)	当て具痕-ナデ	砂-(小)少	並	5Y 7/1 灰白色	5Y 7/1 灰白色	底部近く一部	
37	2号墳 24層	T4東端 旧表土精査中	弥生土器	壺 有段口縁		(2.2)		ナデ	ナデ 指圧痕	海綿骨片多粗粒砂(1~0.5mm)少	良	7.5 YR 6/4 にぶい褐色	7.5 YR 6/4 にぶい褐色	有段口縁	弥生後期
38	2号墳 24層	T4東端 旧表土精査中	弥生土器	壺 口縁部		(2.4)		ヨコナデ ハケ	ナデ	海綿骨片微 粗粒砂(1~0.5mm)	良	7.5 YR 6/4 にぶい褐色	7.5 YR 6/3 にぶい褐色	口縁部	弥生後期 外面: 煉付着
39	2号墳 24層	T4東端 旧表土精査中	弥生土器	壺 有段口縁	(19.0)	(3.2)		ヨコナデ	ヨコナデ ハケ	海綿骨片小粗粒砂(1~0.5mm)少 微礫(2~1.5mm)少	良	10 YR 7/6 明黄褐色	7.5 YR 6/6 褐色	有段口縁 1/12 以下	弥生後期
40	2号墳旧表土	T 4 3層(黒色土) 4層(茶褐色土)	弥生土器	壺 口縁部		(2.95)		ヨコナデ ハケ 摩耗	ヨコナデ ケズリ? 摩耗	海綿骨片小細礫(2~4mm)少 極粗粒砂(2~1mm)少 粗粒砂(1~0.5mm)多	良	7.5 YR 8/6 浅黄褐色	7.5 YR 5/2 灰褐色	有段口縁 1/12	
41	2号墳 ④層	T4墳裾?周溝?埋土黄褐色土	土師器 or 弥生土器	壺 口縁部	(19.1)	(3.9)		ミガキ?	ミガキ?	礫(3~4mm)少(石英) 極粗粒砂(1.5~1mm)少 粗粒砂(1~0.5mm) やや多	良	10 YR 7/6 明黄褐色	10 YR 7/6 明黄褐色	口縁部	内外面: 赤彩 僅かに残る
42	2号墳 ④層	T4墳裾?周溝?埋土黄褐色土	土師器	壺		(4.3)		ヨコナデ	ケズリ	微礫(2~1.5mm)少 極粗粒砂(1.5~1mm)少 粗粒砂(1~0.5mm) やや多	良	5 YR 7/8 褐色	10 YR 8/6 黄褐色	胴部	褐色の化粧土か?
43	2号墳 T4溝⑧層	T4西端 周溝埋土5層 茶褐色土/6層周溝	弥生土器	壺 底部	3.9	8.2		ハケ ナデ	摩耗	海綿骨片やや多 礫(4~1.5mm) やや多(石英) 極粗粒砂(1.5~1mm)多	並	7.5 YR 7/6 褐色	7.5 YR 7/6 褐色	底部完形	清埋土⑤⑧層で出土した破片が接合
44	トレンチ2 2号墳溝⑩層	T2土器溜り土器⑦北壁面	土師器	壺		(8.1)		ハケ 指圧痕	ケズリ	細礫(4~2mm)少(石英) 粗粒砂(1~0.5mm)多 海綿骨片多	良	7.5 YR 5/4 にぶい褐色	7.5 YR 6/4 にぶい褐色	胴部	1と同一個体
45	トレンチ2 2号墳溝⑩層	T2同溝?落ち込み5層土器③	土師器	壺?		(6.9)		ハケ	ケズリ	海綿骨片多微礫(2~1.5mm)少 極粗粒砂(1.5~1mm)少 粗粒砂(1~1.5mm)多	良	7.5 YR 6/6 褐色	10 YR 6/6 明黄褐色	胴部	同一個体の破片がまとまって出土 44と同一個体
46	1号墳前方部北西	前方部北西端	鉄片	鉄	(3.5)	(1.9)	(0.6)			重量: 40 g				小片	不明鉄製品
47	1号墳前方部北西	前方部北西端	鉄片	鉄	(4.8)	(2.7)	(0.3)			重量: 7.0 g				小片	不明鉄製品
48	1号墳 T2 ②層目	後円部 T2 掘張(西) 墳頂	鉄刀の茎	鉄	(3.5)	(2.2)	(0.4~0.75)			重量: 18 g				柄の一部	木質残る 目釘穴あり 紐の痕跡
49	1号墳 T2 ④層目	後円部 T2 掘張(西) 墳頂	長頸鉄	鉄	(3.4)	(0.8)	(0.35)			重量: 9.13 g				長頸鉄の先端部分	長頸鉄 IV-2 X 期 (MT85-TK43 併行)
50	1号墳 T2 ②層目	後円部 T2 掘張(西) 墳頂	ガラス小玉	ソーダ石灰ガラス	(0.75)	(0.6)	(0.5)			重量: 0.3678 g				完形	

第5章 まとめ

第1節 佐味今田谷内古墳群の調査成果

国史跡となった万行遺跡で発見された大型建物群（古墳時代はじめ）の造営者の究明が一つの課題であった。その奥津城として佐味今田谷内古墳群が候補のひとつとして注目されていた。折しも、古墳群が所在する土地の所有者が古墳群の保存と周辺環境の維持、地域の歴史の啓蒙を目的とした保存会を立ち上げ、調査及び保存へのご協力があったため、市教委として万行遺跡との関連性、七尾地域における古墳の移り変わりを解明するために保存を目的とした確認調査を実施した。その調査成果を記す。

1号墳（前方後円墳）

全長（推定）29m、後円部径（推定）18.4m、後円部高（推定）2.4m（東端）：3m（南端）、前方部長（推定）10.6m、前方部高1m（北端）、前方部幅（推定）10mで後円部、前方部とも全体的に削平を受けている。後円部墳頂は、盗掘を受けており、正確な埋葬施設の構造は不明だが、周辺に海石（石灰質細粒砂岩）や板石（安山岩：須曽石）が散在するため、石材を使用した埋葬施設の可能性が考えられた。T1・2の調査で後円部の下半部は地山を削り出し、旧表土面より上は盛土工法で築造していることが分かった。ただし、詳細な築造過程は不明。北・西側は谷地形を利用して墳丘を大きく見せる意図がうかがえた。埴輪・葺石なし。段築は確認できない。T2の後円部墳頂の攪乱土である②層からガラス玉1点(50)と鉄刀の茎1点(48)、④層から長頸鏃4点(49)が出土した。ガラス玉は、蛍光X線定性分析により、基礎ガラス材質はソーダ石灰ガラスでコバルトによるイオン着色であると推定された。鉄刀の茎は、X線透過撮影により木質の柄に有機質の紐が巻きつけられていることが確認できた好例であった。長頸片刃箭式の鉄鏃は、錆着により判断が難儀であったが、形状から6世紀前半から中頃に推定された。前方部からくびれ部西にかけて、須恵器（台付壺、甕、高杯又は装飾器台？）の破片が集中して出土しており、矢田高木森古墳のような墓前祭祀を執り行っていた可能性が考えられる。出土遺物から6世紀前半から中頃の築造と推定できる。

2号墳（円墳）

直径30m（推定）、墳丘高6.4m（南端：標高21m）を測る円墳。現状は南北に長く、墳丘の東・西側は削平されている。現況で墳頂部は径約9mの平坦面になっており、保存状況は良好ですが、埋葬施設の構造は不明。標高約21m辺りで平坦面を作りだし、墳丘の中腹にある旧表土面から下を地山削り出し、上を盛土で築造していると推定できる。1号墳と2号墳の間で確認された溝（幅6m、深さ0.8m）は、T5・6の旧地形の状況からも2号墳に付属する周溝の可能性が高い。地形の状況から西側のみに存在すると思われる。時期を特定する遺物は出土していない。埴輪・葺石、段築はない。

3号墳（円墳）

1号墳から20m南側の尾根先端部にある小型円墳。東西が直線的なため、方墳にも見えたが円墳として判断した。復元径約11m、高さは1m（標高20mライン）。出土遺物はない。4号墳は未調査。

まとめ

佐味今田谷内古墳群の西には、七尾鹿島地域の中期後半から後期を代表する「矢田古墳群」が存在し、6世紀初頭の盟主墳である矢田高木森古墳（前方後円墳、全長58m）や先行して矢田丸山古墳（円

第5章 まとめ

第1節 佐味今田谷内古墳群の調査成果

国史跡となった万行遺跡で発見された大型建物群（古墳時代はじめ）の造営者の究明が一つの課題であった。その奥津城として佐味今田谷内古墳群が候補のひとつとして注目されていた。折しも、古墳群が所在する土地の所有者が古墳群の保存と周辺環境の維持、地域の歴史の啓蒙を目的とした保存会を立ち上げ、調査及び保存へのご協力があったため、市教委として万行遺跡との関連性、七尾地域における古墳の移り変わりを解明するために保存を目的とした確認調査を実施した。その調査成果を記す。

1号墳（前方後円墳）

全長（推定）29m、後円部径（推定）18.4m、後円部高（推定）2.4m（東端）：3m（南端）、前方部長（推定）10.6m、前方部高1m（北端）、前方部幅（推定）10mで後円部、前方部とも全体的に削平を受けている。後円部墳頂は、盗掘を受けており、正確な埋葬施設の構造は不明だが、周辺に海石（石灰質細粒砂岩）や板石（安山岩：須曽石）が散在するため、石材を使用した埋葬施設の可能性が考えられた。T1・2の調査で後円部の下半部は地山を削り出し、旧表土面より上は盛土工法で築造していることが分かった。ただし、詳細な築造過程は不明。北・西側は谷地形を利用して墳丘を大きく見せる意図がうかがえた。埴輪・葺石なし。段築は確認できない。T2の後円部墳頂の攪乱土である②層からガラス玉1点(50)と鉄刀の茎1点(48)、④層から長頸鏃4点(49)が出土した。ガラス玉は、蛍光X線定性分析により、基礎ガラス材質はソーダ石灰ガラスでコバルトによるイオン着色であると推定された。鉄刀の茎は、X線透過撮影により木質の柄に有機質の紐が巻きつけられていることが確認できた好例であった。長頸片刃箭式の鉄鏃は、錆着により判断が難儀であったが、形状から6世紀前半から中頃に推定された。前方部からくびれ部西にかけて、須恵器（台付壺、甕、高杯又は装飾器台？）の破片が集中して出土しており、矢田高木森古墳のような墓前祭祀を執り行っていた可能性が考えられる。出土遺物から6世紀前半から中頃の築造と推定できる。

2号墳（円墳）

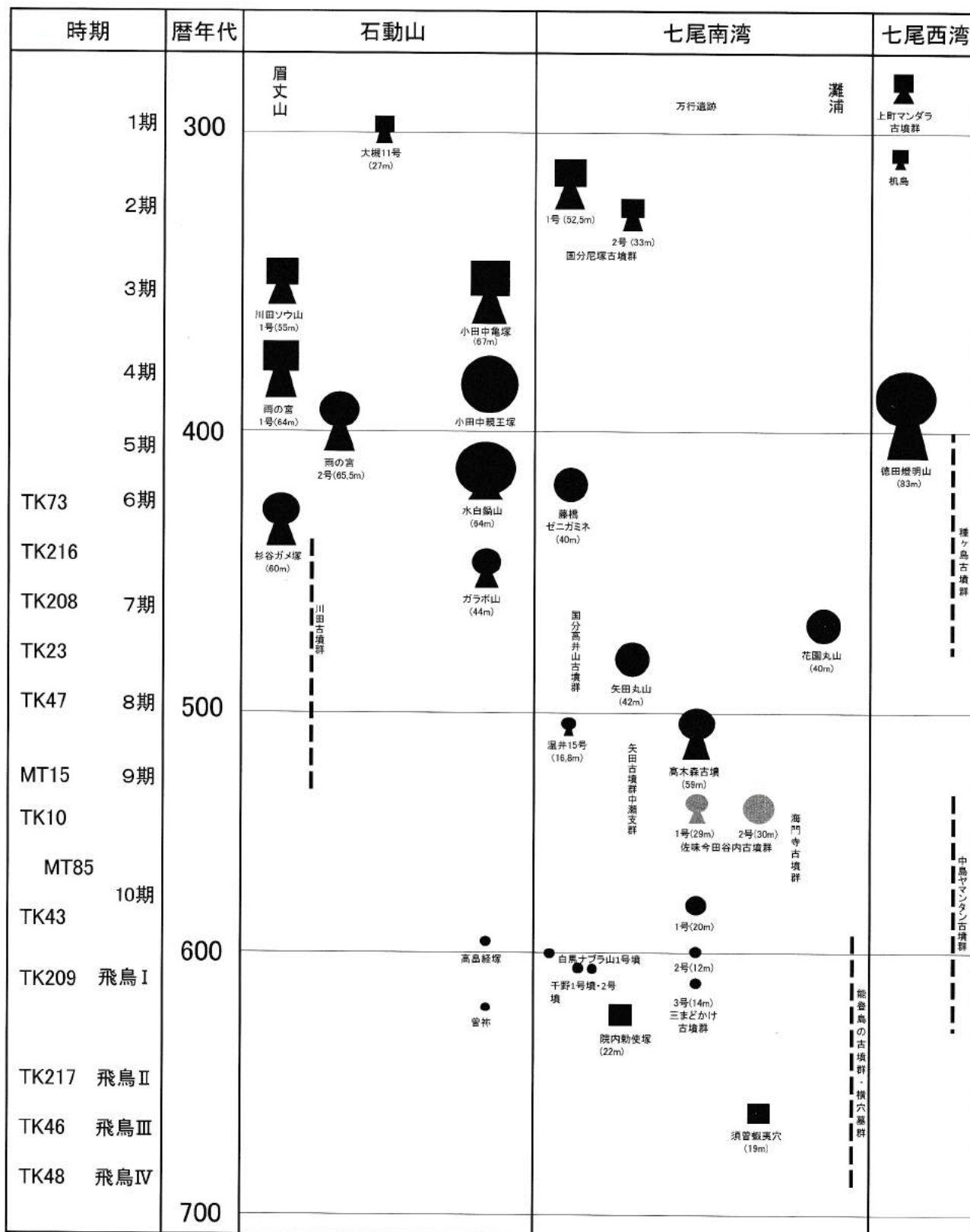
直径30m（推定）、墳丘高6.4m（南端：標高21m）を測る円墳。現状は南北に長く、墳丘の東・西側は削平されている。現況で墳頂部は径約9mの平坦面になっており、保存状況は良好ですが、埋葬施設の構造は不明。標高約21m辺りで平坦面を作りだし、墳丘の中腹にある旧表土面から下を地山削り出し、上を盛土で築造していると推定できる。1号墳と2号墳の間で確認された溝（幅6m、深さ0.8m）は、T5・6の旧地形の状況からも2号墳に付属する周溝の可能性が高い。地形の状況から西側のみに存在すると思われる。時期を特定する遺物は出土していない。埴輪・葺石、段築はない。

3号墳（円墳）

1号墳から20m南側の尾根先端部にある小型円墳。東西が直線的なため、方墳にも見えたが円墳として判断した。復元径約11m、高さは1m（標高20mライン）。出土遺物はない。4号墳は未調査。

まとめ

佐味今田谷内古墳群の西には、七尾鹿島地域の中期後半から後期を代表する「矢田古墳群」が存在し、6世紀初頭の盟主墳である矢田高木森古墳（前方後円墳、全長58m）や先行して矢田丸山古墳（円



第16図 七尾鹿島地区主要古墳編年略図

※主要古墳および既調査古墳を掲載

伊藤雅文『古墳時代の王権と地域社会』学生社2008
「能登半島における古墳編年図」を一部加筆・修正

墳、径約42m、高さ7.5m、円筒埴輪）が築造されている。6世紀後半には七尾南湾への玄関口にあたる崎山半島に三室まどがけ古墳群（1号墳：推定全長10mの横穴式石室）が築造される。矢田高木森古墳や三室まどがけ古墳群では、海石が石室の石材として、板石が石室の敷石として使用されており、今回の調査でも1号墳・2号墳とも埋葬施設は未確認であったが、同じ石材が採集できることから類似した埋葬施設が推測できる。これは七尾南湾地域の同一勢力圏内と想定できることから、佐味今田谷内古墳群は、地理的にこれらの中間地域にあり、また時代的にもこれらの間（6世紀前半～中頃）に位置づけられそうだが、被葬者については盟主クラスというより、七尾南湾東部地域を掌握した人物に準じる被葬者が想定される。

2号墳の時期については、出土遺物もわずかであることから特定できない。1号墳との前後関係も周溝の切り合いや堆積状況からも判断しがたい状況である。

直径30m級の円墳は七尾鹿島地域では中型の円墳で40m級の大型円墳である矢田丸山古墳や花園円山古墳、藤橋ゼニガミネ古墳が存在するが、いずれも古墳時代中期（5C代）に位置づけられる。

後期以降は墳丘の規模が縮小していく傾向がある中で、墳丘も高く古相を示す要素もあるが、今のところは1号墳と前後する時期に築造されたと想定したい。今後は周辺の海門寺古墳群や赤崎古墳群、三室古墳群等の測量調査や比較検討を行うことで地域史の中で位置づけていけそうである。

今回の調査を通じて所有者が保存会を設立し、発掘調査から完了まで色々とお世話を受けた。また、今後は古墳公園としての活用策も保存会内で検討されている。

現地説明会では住民が地元の歴史を再発見する良い機会となり、質疑応答にも熱が入った。合わせて、古墳のある丘陵に植生する照葉樹林の樹木名を植物の専門家にお聞きし、名札をつけて古墳のある環境も含めた自然観察会も好評であった。市教委としても地元や保存会の熱意を受け、今後は相互に協力しながらふるさと学習の教材として他の遺跡や文化財も合わせての活用も考えていきたい。古墳は山城と同じく、ありのままでも存在感があり、地域の歴史を語るシンボルでもある。古墳の立地する場所は、七尾湾を見下ろす絶景ポイントであり、豪華客船「飛鳥Ⅱ」が七尾港に入港した際にも眺望することができた。古来より、海・港とともに発展してきた歴史をもつ“七尾”の歴史を語る上で、また今後の地域の宝である文化財の活用を図る上での端緒になる調査になった。今回の調査をきっかけにより身近な文化財の周知に心がけていきたい。

【参考文献】

- 『能登 高木森古墳』七尾市文化財保護委員会 1960
- 『古墳時代の研究 7 古墳 1 墳丘と内部構造』雄山閣 1998
- 「七尾市の古墳時代」『新修 七尾市史 1 考古編』七尾市役所 2002
- 『古墳時代の王権と地域社会』伊藤雅文 学生社 2008



1号墳全景夕景写真(2号墳上より 東から撮影)



後円部南西斜面(墳頂東から)



後円部墳頂T2(北東から)



前方部から後円部を見るT3(北から)



後円部西斜面(南から)



後円部南斜面(南東から)



後円部から前方部を見る(南から)

図版2
1号墳
3号墳



T1 (南東から)



1号墳全景 (東から)



T2 後円部 (北東から)



3号墳 (北から)



T2 周溝西側肩部 (南から)



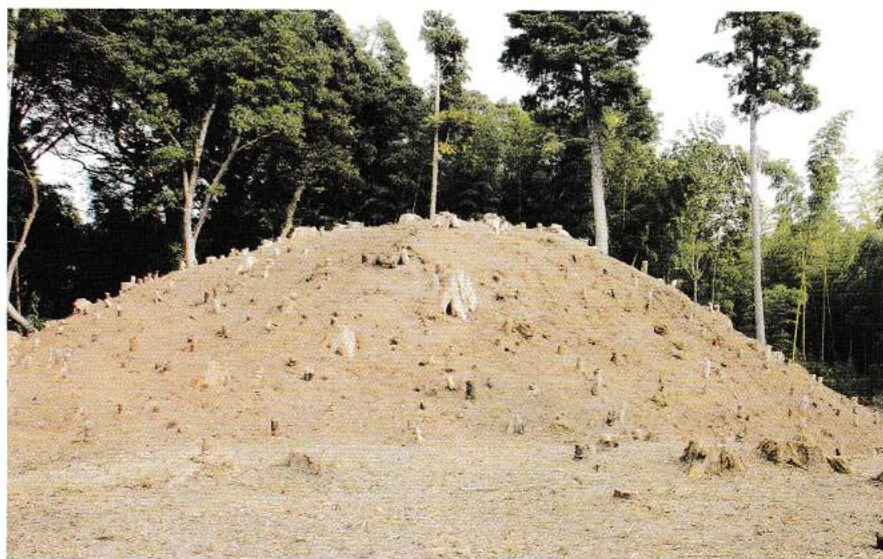
T3 前方部先端 (南から)



T3 前方部端 区画溝 (西から)



墳丘に散乱する板石



2号墳全景（北西から）



2号墳全景（西から）



墳頂から七尾南湾を見下ろす（南から）



墳頂部（南から）



北東斜面（北から）



墳頂から南東斜面を見下ろす（北から）



東斜面（南から）

図版4
2号墳



2号墳全景(西から)



T4 西端 周溝底部土器出土(北東から)



T4 断ち割り(南西から)



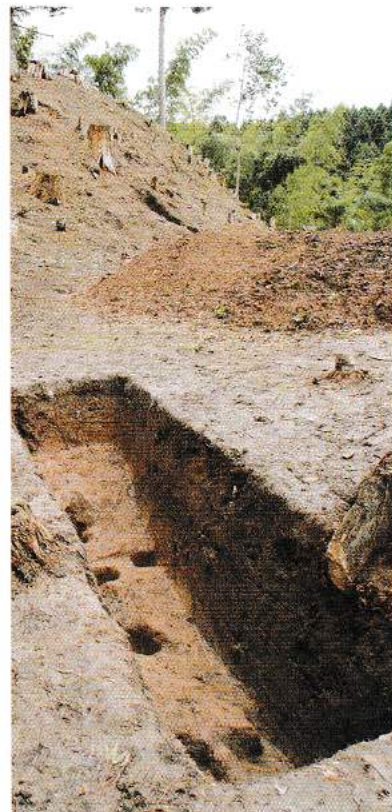
墳頂から北側を見る



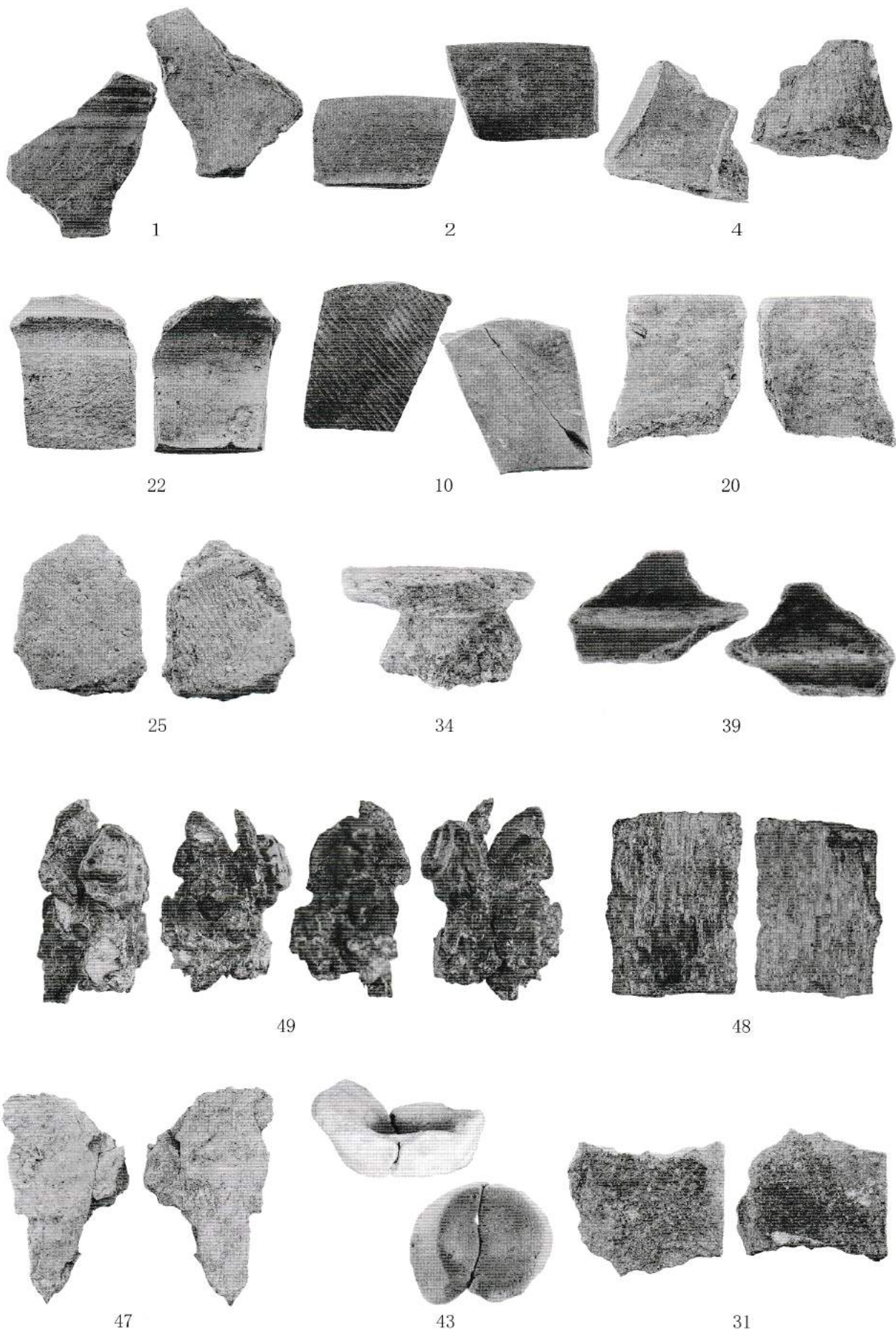
T4 完掘状況(西から)



T5 円墳南西(北東から)



T6 円墳北西(北西から)



七尾市埋蔵文化財調査報告書一覧

第1輯	国分岩屋古墳 (28頁) 泉水受水池建設工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1985
第2輯	赤浦遺跡 (28頁) 土砂採取事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1985
第3輯	石川県指定史跡院内勅使塚古墳 (20頁) 環境整備 (保存修理) 事業に係る第一次発掘調査報告書	1985
第4輯	池崎窯跡 (36頁) 転作促進対策特別事業 (転換水田整備事業) に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1985
第5輯	小島六十苅遺跡 (58頁) 西部地区土地区画整備事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1986
第6輯	能登国分寺跡 (42頁) —第四次発掘調査報告書—	1986
第7輯	矢田遺跡 (108頁) 万行地区転作定着化推進県田圃場整備事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1986
第8輯	千野高塚古墳 (24頁) 宅地開発に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1986
第9輯	白馬ナブラ山1号墳 (25頁)	1989
第10輯	史跡能登国分寺跡 (162頁) —第五・六・七次発掘調査報告書—	1989
第11輯	史跡能登国分寺跡 (116頁) —第八次発掘調査報告書—	1990
第12輯	七尾市小池川原地区遺跡 (101頁) 七尾市小池川原地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1990
第13輯	藤野遺跡発掘調査報告書 (92頁) 七尾市東部中学校新築工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1991
第14輯	史跡能登国分寺跡 (45頁) —第九次・展示館建設地発掘調査報告書—	1991
第15輯	七尾城下町遺跡七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書 (123頁)	1992
第16輯	大野木タキシロ遺跡 (67頁) 中山間地域農村活性化総合整備事業大野木圃場整備事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1993
第17輯	下町茶畑遺跡 (101頁) 七尾市南部工業団地造成事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1994
第18輯	藤橋十三塚発掘調査報告書 (52頁)	1994
第19輯	藤橋ゼニガミネ古墳 (110頁) 藤橋丘陵開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書	1994
第20輯	能登国分寺跡 (55頁) —遺跡の範囲確認を目的とした発掘調査—	1995
第21輯	七尾市内遺跡発掘調査報告書 (50頁) —古府・国分遺跡、七尾城跡範囲確認調査—	1996
第22輯	此の木エダ遺跡・大田谷内遺跡 (35頁) 団体営土地改良総合整備事業 (大田町此の木地区・海門寺地区) に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1996
第23輯	奥原峠遺跡 (150頁) —主要地方道七尾能登島公園線改良工事に伴う発掘調査報告書—	1998
第24輯	能登国分寺跡 (74頁) —個人住宅建設に伴う緊急調査の報告書—	2000
第25輯	七尾市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ (134頁) —七尾城下範囲確認および開発に伴う事前調査等の発掘調査報告書—	2002
第26輯	三室遺跡群 (三室オオタン・トクサ・新崎遺跡) 発掘調査報告書 (163頁) —LPG 国家備蓄基地造成工事に伴う発掘調査報告書—	2002
第27輯	小牧白山社中世墓群 (32頁) 平成14年度小牧白山社側道整備に係る発掘調査と 平成15年度小牧白山社中世墓範囲内容確認調査の報告書	2005
第28輯	万行遺跡発掘調査報告書	2007
第29輯	八幡・千野遺跡群 千野林田遺跡発掘調査報告書 (120頁)	2009
第30輯	石川県・能登半島 七尾城跡発掘調査報告書 (90頁) —一般国道470号能越自動車道 (七尾水見道路) 建設に伴う 工事用道路建設を原因とする戦国時代七尾城下の発掘調査報告—	2009
第31輯	史跡七尾城跡 石垣修復事業報告書 (81頁) —能登半島地震に係る災害復旧事業—	2009
第32輯	八幡大皆口遺跡発掘調査報告書 (171頁) 国道159号七尾バイパス道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2010
第33輯	花園上田遺跡発掘調査報告書 (86頁) 一般国道470号 能越自動車道 (七尾水見道路) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2012
第34輯	史跡 能登国分寺跡発掘調査報告書 (78頁) —平成19年度～23年度の範囲確認調査報告—	2012
第35輯	七尾市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ (81頁) —平成14年度～24年度事前調査等の発掘調査報告—	2013
第36輯	七尾城跡 (P11・旧市道区) 一般国道470号 能越自動車道 (七尾水見道路) の城山高架橋 P11 橋脚建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2014
第37輯	史跡 万行遺跡範囲確認調査報告書 (31頁) —平成18・20・22・24年度の範囲確認調査報告—	2014
第38輯	千野林田遺跡 (G区) 発掘調査報告書 (74頁) 能登国道維持出張所 除霊ST建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2015
第39輯	上町A遺跡・上町B遺跡発掘調査報告書 (36頁) —県営ほ場整備事業 (上町・浜田地区) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2015
第40輯	佐味今田谷内古墳群発掘調査報告書 (44頁)	2016

報 告 書 抄 録

ふりがな	さみいまだやちこふんぐんはくつちょうさほうこくしょ					
書名	佐味今田谷内古墳群発掘調査報告書					
副書名	一平成25・26・27年度に実施した内容確認調査一					
巻次						
シリーズ名	七尾市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第40輯					
編著者名	北林雅康					
編集機関	七尾市教育委員会 文化課					
所在地	〒926-8611 石川県七尾市袖ヶ江町イ部25番地					
発行年月日	平成28年(2016)3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号			
		17202	02213			
		北緯	東経			
さみいまだやちこふんぐん 佐味今田谷内古墳群 (B25)	いしかわけんなおし 石川県七尾市 さみまち 佐味町	37° 02' 53.4837"	137° 00' 05.7792"	2013.10.22 } 2013.3.18	800㎡	内容確認調査
さみいまだやちこふんぐん 佐味今田谷内古墳群 (B26)	いしかわけんなおし 石川県七尾市 さみまち 佐味町	37° 02' 52.3667"	137° 00' 05.6653"	2014.9.9 } 2014.11.27	4,650㎡	〃
さみいまだやちこふんぐん 佐味今田谷内古墳群 (B27)	いしかわけんなおし 石川県七尾市 さみまち 佐味町	37° 02' 53.8089"	137° 00' 07.1880"	2015.10.16 } 2015.12.18	4,650㎡	〃
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
佐味今田谷内古墳群	古墳	古墳	1号墳(前方後円墳) 2号墳(円墳) 3号墳(円墳) 4号墳(円墳?)	1号墳 縄文土器・ 土師器・須 恵器・ガラ ス玉・鉄刀 の茎・長頸 鎌・板石	・七尾南湾を臨む丘陵に 所在 ・古墳時代後期の古墳群	
要約	<p>万行遺跡との関わり確認するために保存目的とした確認調査を実施した。 地理的には矢田高木森古墳と三室まどがけ古墳の中間に位置し、1号墳は古墳時代後期の6世紀前半から中頃と判明した。 七尾南湾における古墳の変遷を知る上で貴重な調査となった。</p>					

《印刷の仕様》

- 半型……A 4判
- 頁数……44頁
- 組版……主要活字（10ポイント明朝体）
- 印刷……オフセット印刷
- 製版……図版、写真とも175線
- 用紙……表紙
ニューエイジ 135kg
本文、図版
ニューエイジ 110kg
- 製本……無線綴じ

七尾市埋蔵文化財調査報告書 第40輯

佐味今田谷内古墳群発掘調査報告書

平成25・26・27年度に実施した内容確認調査報告

編集 七尾市教育委員会 文化課
発行 七尾市教育委員会 文化課
発行日 平成28年(2016)3月31日(木)
印刷 第一印刷株式会社
発行所 七尾市教育委員会 文化課
〒926-8611 石川県七尾市袖ヶ江町イ部25番地
Tel (0767) 53-8437 Fax (0767) 52-5194
七尾市文化財資料整理室
〒926-0861 石川県七尾市寿町64番地
Tel (0767) 53-5071 Fax (0767) 53-5071
